史跡稲荷森古墳
保存修理事業報告書

1993年3月
南陽市教育委員会

整備写真 1　稲荷森古墳　全景（東から）

1　整備完了時全景　（平成４年度、北から）

2　着工時全景（平成元年度、北東から）

整備写真２

1　公有地化前全景　（昭和58年度、南東から）［南陽8ミリクラブ提供］

2　古墳広場全景（南から）

整備写真３

国指定史跡稲荷森古墳（いなりもりこふん）

1　指　定　　昭和55(1980)年5月24日

2　所　在　　南陽市長岡1,175番地 他

3　指定事由

昭和9年の発見後、諸調査の結果、東北地方有数の規模(県内最大、東北地方第6位)を持ち、日本海側では北限の卓越した古式の前方後円墳と判明し、東北古代史を解明するうえで重要な位置を占める。

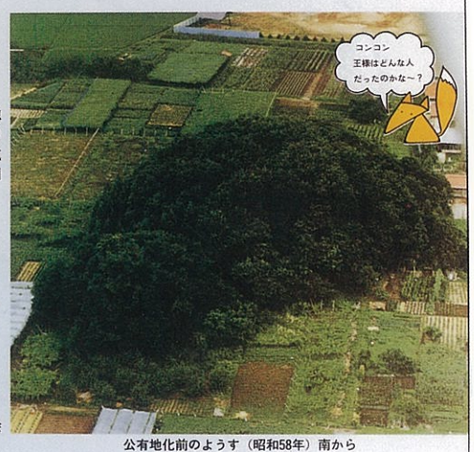
4　古墳の寸法

全長	96m
後円部直径	62m
前方部の長さ	34m
後円部の高さ	96m
前方部の高さ	4m

5　指定地面積　　10,182.7㎡

平成5年3月

南陽市教育委員会



公有地化前のようす（昭和58年）南から

●稲荷森古墳とは？

古墳時代のはじめのころ、いまから1,600年以上前（4世紀）に、この地方を治めた首長（王）の墓です。

●古墳のかたち

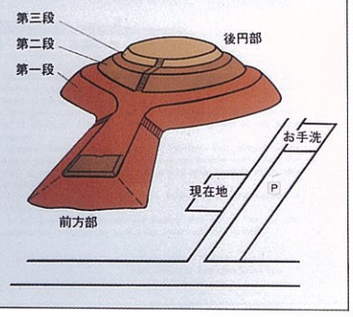
四角い「前方部」と円い「後円部」からなり、前方後円墳といいます。後円部は3段に、前方部は南側が部分的に2段につくられています。

●古墳の特徴

埴輪、葺石、周濠はありません。また、前方部は後円部に比べて小さめにつくられています。

●埋葬施設

内部の埋葬施設は、わかっていません。石室は作られず、木のお棺を直接埋葬したとおもわれます。



説明看板①

稲荷森古墳は、今までの4回の発掘調査により、つくり方やおおよその年代、保存がよい古墳であることなどがわかりました。

1,600年以上も前に、これほど大きな古墳をつくることができた首長（王）の権力は相当なものです。

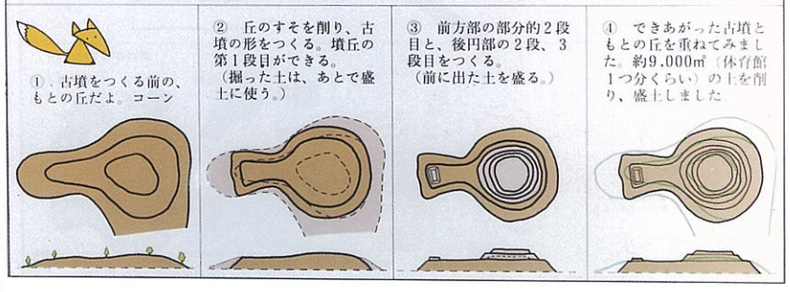
整備工事開始時　　（平成元年秋）北東から

A　高杯形土器
「稲荷森古墳がつくられる直前ごろの土器」
旧白鷹土師から出土、山形県立博物館所蔵

A　稲荷森古墳の盛土のようす
「黒っぽい土や赤い土等が交互に盛られています」

B　古墳の祭に使われた土器
「壺の底に穴のあいた土器です。稲荷森古墳後円部出土」

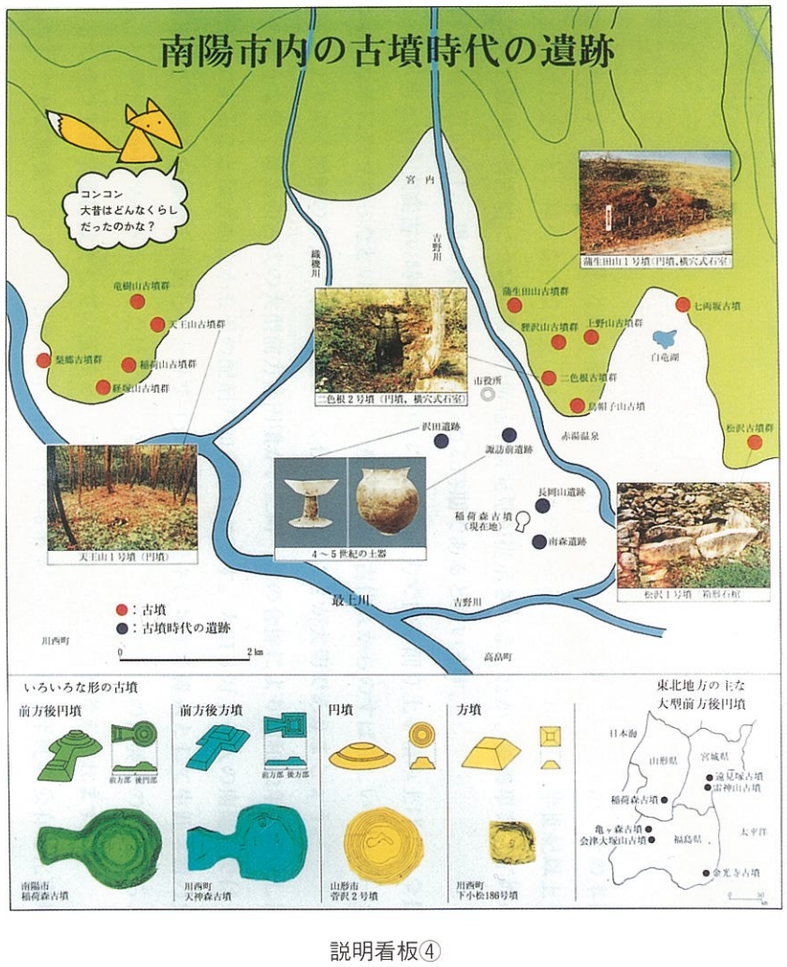
稲荷森古墳のつくり方（推定図）



説明看板②

説明板写真1

説明看板③



説明看板④

説明板写真 2

序

論語にあります「温故知新」という言葉は日常生活でよく用いられておりますが、その本来の意味を再考致しますと、稲荷森古墳に実にふさわしいものであると考えられます。半世紀以上も前に着目されて以来、当古墳について多くの所見や新発見が提示されましたが、整備事業完了の今こそ既知の事柄を思い起し、更に新しい目で見つめる時期であると思います。

1,600年前という大変古い時代に、ときの王のために人力で山を削り土を積み上げて、全長96mもの端正な姿に形づくったという事実をもう一度認識し、古代人からのすばらしいメッセージである古墳をより深く理解のうえ、その価値を広く伝えていくことが大切でありましょう。

このような県下最大の古式の大型前方後円墳が、二町一村の合併により昭和42年に誕生した青年都市南陽にあることは、あたかも天の配剤の如く思われます。人口３万７千人の南陽市では５万人都市をめざし様々な事業を展開しておりますが、これら経糸に対する緯糸として生涯学習の分野があり、ハード面からソフトへ、または行政の文化化あるいはアメニティの進展等の観点から、稲荷森古墳の持つ生涯学習施設としての意義と果すべき役割は大きいものと考えられます。

10年にも及ぶ整備が完了しましたが、これまでの諸事業の内、昭和58年度の公有地化事業時は、地権者の方々には多くの御理解と御協力を賜りました。そして整備に先だつ昭和62～63年度の発掘調査時は、大型古墳の調査という大変難しいものでありましたが、明治大学教授大塚初重先生はじめ諸先生から多大な御指導を頂きました。加えて整備事業着手に至るまで、山形大学教授（元文化庁主任文化財調査官）仲野浩先生には様々な角度から御指導を賜りました。

調査及び保存修理事業開始時は、文化庁安原啓示主任文化財調査官と加藤允彦文化財調査官から、そして工事事業の大半について田中哲雄主任文化財調査官から、細部に至るまで御懇篤な御指導を賜りました。また、この一連の事業の間山形県教育委員会（文化課）からは、多大な御協力と御指導を頂戴致しました。関係各位には改めて衷心から深甚なる感謝を申し上げます。

このように多くの御指導と御協力を受けて整備が完了致しましたが、今後は墳丘・植栽・諸施設に対し、維持・管理を図り保存を行うと共に、生きた歴史を学ぶ場として活用のうえ次代に引き継いでいきたいと切に念じ、ごあいさつと致します。

平成５年３月

南陽市教育委員会

教育長　佐　野　欽　一

例　言

1．本書は、山形県南陽市長岡字稲荷森に所在する国指定史跡稲荷森古墳の保存修理事業報告書である。

2．本事業は、国庫補助金及び山形県補助金の交付を受け、文化庁記念物課と山形県教育庁文化課の指導を得て、南陽市と南陽市教育委員会が主体となって、昭和63年度から平成4年度まで実施した。この内昭和63年度は発掘調査、平成元～4年度が保存修理工事である。

3．昭和62年度は「史跡稲荷森古墳発掘調査事業」として調査を実施した。

4．整備に係わる基礎資料を得るために昭和62～63年度に実施した発掘調査については、各年度ごとに報告書を発刊していることから、本書では調査結果概要を記載するに留めた。

5．本書では、昭和58年度の公有地化事業についても概要を記載した。

6．本書における工種の区分は、概ね各年度の工事実施設計書に基づいている。

7．本書中の工事写真は、工事請負業者撮影のものも使用した。

8．本書における稲荷森古墳測量図等の図中の方位は、真北を示す。

9．工事図面の内、寸法の記載があるものにはスケールを入れていない。

10．本書の第1図には、国土地理院発行1／25,000地形図「赤湯」の一部を使用した。

11．本書は、全て中性紙を用いている。

12．この事業について、つぎの方々や機関から助言と協力をいただいた。

山形大学教授　仲野 浩先生　　明治大学教授　大塚初重先生

山形県立赤湯園芸高等学校（昭和63～平成2年度）　山形県立南陽高等学校（平成3～4年度）

山形県立博物館　山形市教育委員会　米沢市教育委員会　川西町教育委員会　高畠町教育委員会　南陽市長岡地区　南陽市長岡堰水利組合　稲荷森古墳保存会　南陽８ミリクラブ　（財）山形県都市整備協会

13．本報告書は、南陽市教育委員会社会教育課が作成した。作成にあたり、当事業の工務担当の市都市計画課（安彦 博計画係長及び安部史生建築係長）の協力を得て次の分担により執筆した。編集及び写真関係は角田朋行の協力を得て吉野一郎が行った。なお、第5章の英文要旨及び当該工事における説明板の英文に関しては吉野の訳文について、南陽市教育委員会学校教育課英語指導助手（Ａ．Ｅ．Ｔ．）Simon（サイモン） A. Reeves（リーブス）の校閲を受けた。

第１章～第３章 社会教育課文化係主事 角田朋行

第４章～第５章 社会教育課文化係係長 吉野一郎

目　次

第１章　立地と環境
　１　自然環境 …… 1
　２　歴史的環境 …… 1
第２章　指定と公有地化
　１　指定までの経過 …… 5
　２　山形県立博物館による発掘調査 …… 6
　３　公有地化事業 …… 6
第３章　整備に係る発掘調査の概要
　１　昭和62、63年度の発掘調査 …… 9
　２　調査の結果 …… 9
第４章　保存修理事業
　１　全体計画 …… 13
　（１）基本計画 …… 13
　（２）実施計画 …… 14
　２　保存修理工事の概要 …… 19
　（１）土工事 …… 19
　（２）法覆・筋芝工事（墳丘部修復工事） …… 19
　（３）給排水工事 …… 20
　（４）園路工事 …… 20
　（５）修景工事 …… 36
　（６）教養施設工事 …… 39
　（７）休養施設工事 …… 41
　（８）管理施設工事 …… 41
第５章　整備のまとめ
　１　整備と今後の管理 …… 51
　２　英文要旨（SUMMARY） …… 51
　　註、参考文献 …… 53

挿　図　目　次

第１図　稲荷森古墳と周辺の古墳時代の遺跡 …… 2
第２図　蒲生田山古墳群地形図 …… 3
第３図　稲荷森古墳公有地化前測量図 …… 5
第４図　稲荷森古墳公有地化前字限図 …… 7
第５図　稲荷森古墳測量図 …… 8
第６図　稲荷森古墳調査全体図 …… 11～12
第７図　稲荷森古墳保存修理工事全体図 …… 17～18
第８図　土工事平面図 …… 21～22
第９図　土工事横断図（１） …… 23～24
第10図　土工事横断図（２） …… 25～26
第11図　土工事横断図（３） …… 27～28
第12図　墳丘土工事縦断図 …… 29～30
第13図　後円部盛土修復か所詳細図 …… 31
第14図　給水工・排水工詳細図 …… 32
第15図　給排水工・法覆工・階段工・路面工・管理工平面図 …… 33～34
第16図　階段工詳細図 …… 35
第17図　入口広場工詳細図 …… 37
第18図　高木・低木植栽構造図 …… 38
第19図　説明板構造図 …… 39
第20図　史跡名称碑構造図 …… 40
第21図　方位盤構造図 …… 40
第22図　古墳広場タイル工断面図 …… 42
第23図　古墳広場内古墳模型原図 …… 42
第24図　古墳広場平面図 …… 43～44
第25図　四阿構造図 …… 45～46
第26図　ベンチ構造図 …… 45～46
第27図　水飲み構造図 …… 45～46
第28図　防護柵構造図 …… 45～46
第29図　史跡境界杭構造図 …… 45～46
第30図　手洗い立面図 …… 48
第31図　手洗い構造図 …… 49～50

表　目　次

第１表　事業費精算表 ……14
第２表　史跡稲荷森古墳保存修理工事年次割表 ……15

写　真　図　版　目　次

巻頭図版　1　整備写真　1
2　整備写真　2
3　整備写真　3
4　説明板写真　1
5　説明板写真　2
本文中写真　1　冬の稲荷森古墳 ……4
2　蒲生田山古墳群全景 ……4
3　稲荷森古墳発掘調査前状況 ……6
巻末図版　1　整備開始時状況（１）
2　整備開始時状況（２）
3　平地部盛土工事
4　平地部盛土・張芝工事
5　墳頂部盛土・階段工事（１）
6　墳頂部盛土・階段工事（２）
7　墳頂部盛土・階段工事（３）
8　墳丘階段工事
9　後円部東側墳丘修復工事
10　後円部西側墳丘修復工事
11　石段撤去・給排水工事
12　入口広場工事
13　植栽工事（１）
14　植栽工事（２）
15　施設工事（１）
16　施設工事（２）
17　施設工事（３）

第１章　立地と環境

1　自然環境

南陽市は、山形県南部、米沢盆地の北東部に位置し、南北の長さは約22.6ｋｍ、東西は約14.8ｋｍ、面積は約160.12ｋm^2である。

市域の北部は山地と丘陵地域で最北端に白鷹山がそびえ、南部の低地の地形は吉野川と織機川によって形成された宮内扇状地（註１）とその東に接する大谷地（白竜湖）低地からなる。宮内扇状地の扇端付近では吉野川・最上川が西流または北西流し、市域南部の境界線となっている。

宮内扇状地の下方では、吉野川・織機川等の河川によって形成された自然堤防が放射状に分布している。

市内の主要な遺跡は、宮内扇状地に面した丘陵部、扇状地内の自然堤防・河間低地、低平な洪積台地（孤丘）上に立地する。

稲荷森古墳は、宮内扇状地の東南端部にあり、大谷地低地の南西縁辺付近に連なる独立孤丘のひとつである長岡山丘陵（第三紀中新世の凝灰岩）の先端に位置する。所在地は南陽市長岡字稲荷森1,175番地である。ＪＲ赤湯駅からは南東約１．２ｋｍの位置にある。

2　歴史的環境

（１）概況

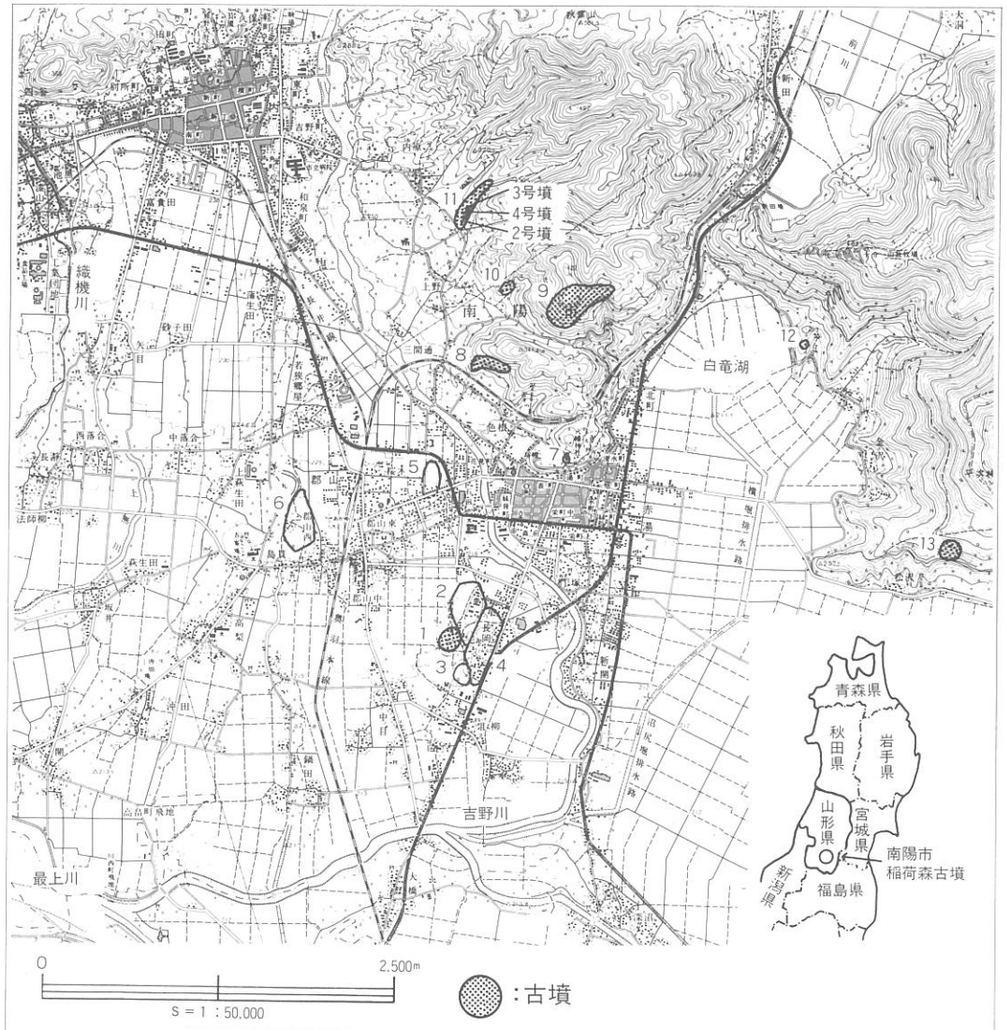
稲荷森古墳が立地する長岡山丘陵や周辺の平地部は、南陽市内でも比較的遺跡が集中している地域である（第１図）。周辺の遺跡をみると、旧石器時代から中世まで続く遺跡として知られる長岡山遺跡をはじめ、長岡山東遺跡、長岡南森遺跡等の独立孤丘上に立地する遺跡が知られており、稲荷森古墳と関わりの深い遺跡と考えられている。

また、稲荷森古墳指定地の北西部に広がる「郡山」地区は、第二次古代置賜郡衙（奈良時代後期～平安時代初期）推定地とみなされている。郡山地区の中心的な集落遺跡である沢田遺跡は、弥生時代から中世に至る大規模な遺跡として知られている。

（２）古墳時代の遺跡

市内の古墳時代の遺跡は現在44カ所が知られている。このうち稲荷森古墳周辺の古墳時代の遺跡は、平地部微高地上に立地するものと、独立孤丘上のものがある。

諏訪前遺跡は、本古墳の北方約1ｋｍにあり、吉野川の自然堤防上に立地している。昭和60年の調査（註2）の結果、土壙から塩釜式期の土師器がまとまって出土している。



No	遺跡名	時代他	No	遺跡名	時代他
1	稲荷森古墳	旧石器、縄文(中期)、古墳(前期)、平安、中世	8	二色根古墳群	古墳(終末期)
2	長岡山遺跡	旧～中石器、縄文(中期)、古墳(前、中、後期)、奈良、平安	9	上野山古墳群	弥生、古墳(終末期)
3	長岡南森遺跡	縄文(中期)、古墳(前、中期)、平安	10	狸沢山古墳群	古墳(終末期)
4	長岡山東遺跡	縄文、古墳、平安	11	蒲生田山古墳群	古墳(前期、終末期)
5	諏訪前遺跡	縄文(中期)、古墳(前期)、平安	12	七両坂古墳	古墳(終末期)
6	沢田遺跡	弥生、古墳(中期)、奈良、平安、中世、江戸	13	松沢古墳群	古墳(後期)
7	烏帽子山古墳	古墳(終末期)			

第１図　稲荷森古墳と周辺の古墳時代の遺跡

長岡山遺跡は、本古墳に隣接する独立孤丘上に立地し、塩釜式期のほか、南小泉Ⅱ式の土師器と石製模造品が出土している（註３）。

長岡山東遺跡は縄文時代と平安時代の遺跡として知られていたが、最近の調査（註４）では、古墳時代の土師器等が出土している。

長岡南森遺跡は、本古墳の南方約150mにある独立孤丘を中心として分布し、南小泉Ⅱ式頃の土師器等が採集されている。

沢田遺跡は、吉野川旧河道の東に発達した自然堤防上に立地し、昭和59年度（1984）の調査（註５）では、２基の住居跡から南小泉Ⅱ式並行の土師器がまとまって出土している。

(３)周辺の古墳

市内赤湯地区の古墳の大部分は、平地部に面した丘陵やその尾根に立地する（第１図）。古墳時代前期の古墳としては、本古墳（第5図）をはじめ、蒲生田山２号墳、３号墳、４号墳がある（第２図）。その他の古墳としては、古墳時代後期の積石塚の古墳である松沢古墳群や、いわゆる終末期古墳に属している二色根古墳群、上野山古墳群、狸沢山古墳群、蒲生田山古墳群、七両坂古墳、烏帽子山古墳が知られている。

蒲生田山古墳群は、南陽市上野字山居沢山及び雨霊沢(通称蒲生田山)に所在する。昭和初期から終末期の古墳群として知られており、残存している１号墳は、丘陵の東斜面につくられた直径約８mの横穴式の小円墳で市指定文化財となっている。

蒲生田山３号墳及び４号墳は平成２年度に発掘調査が行われ、４世紀に溯る前期古墳であるとみなされるに至った。

蒲生田山２号墳は、後円部墳頂部が一部に削平を受けている等改変がみられるが、主軸長は約29mであり、おそらく前期の前方後円墳とみられ、現在墳頂に山の神の石碑等が立っている。

蒲生田山古墳群のうち、これら前期古墳は、南に張り出すゆるやかな丘陵（蒲生田山）の尾根すじ標高280m付近に立地しており、概ね40～50mの間隔を置いて、北々東から３号墳、４号墳、２号墳と尾根伝いに並んでいる。

蒲生田山３号墳は、主軸長約29mの前方後方墳で、前方部端幅約11m、後方部幅約18mを測る。

第２図　蒲生田山古墳群地形図

赤湯町史によれば、かつては遠見台と呼ばれていた。本古墳群中では最も標高が高い古墳である。

蒲生田山４号墳は、主軸長約29mの前方後方墳で、前方部端幅約11m、後方部幅約16mである。

3号墳、４号墳とも周濠内から朱塗りを施したと思われる二重口縁底部穿孔壷型土師器（塩釜式期）等が数個体出土している。両古墳ともにぶどう畑開墾時の整地により、墳丘上半部が削平を受け、主体部は既に失われていたが、３号墳の開墾整地土から板状鉄斧や刀子と思われる鉄製品が出土している。３号墳と４号墳は、稲荷森古墳に先行するかまたは同時期頃に築造された古墳とみなされ、稲荷森古墳と関わりの深い古墳と見られている。

写真１　冬の稲荷森古墳（昭和50年代）

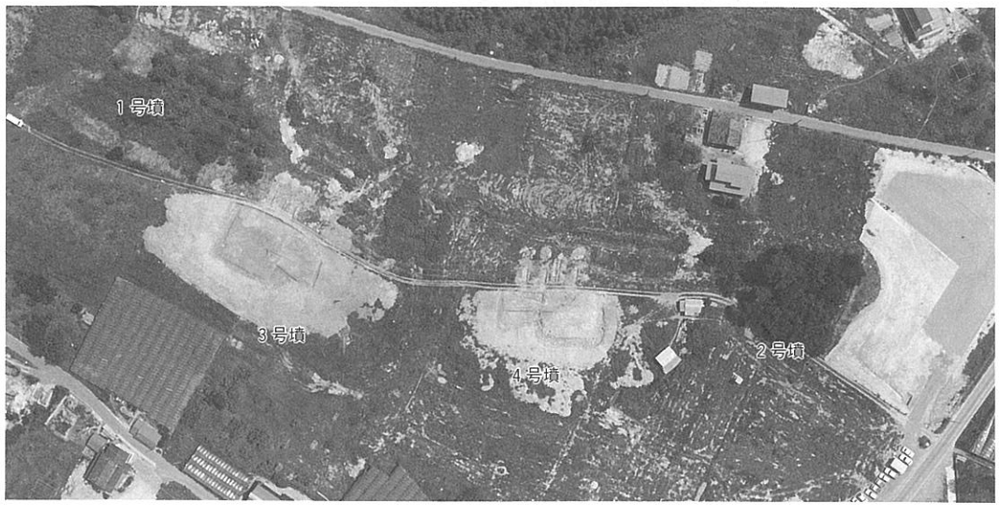


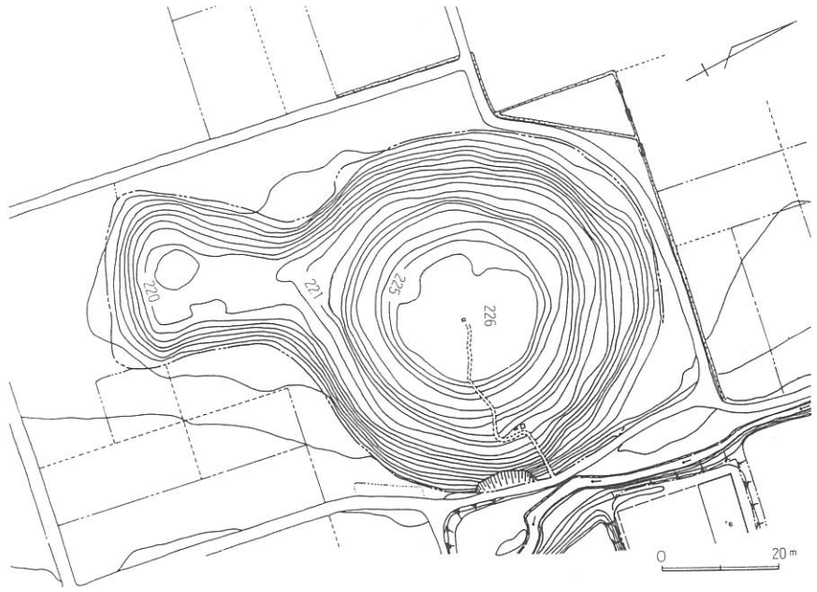
写真２　蒲生田山古墳群全景

第２章　指定と公有地化

1　指定までの経過

稲荷森古墳は、昭和初期に新山三郎氏により発見された（註6）。その後、昭和13年には西村真次氏により報告（註7）がなされた。昭和36年には柏倉亮吉氏（当時山形大学教授）による2次にわたる調査（註8）が行われたが、その結果、墳形が前方後円墳に類似していることを認識したものの、稲荷森古墳が古墳であるという断定は控えられた。この時に作成された略測図に基づき旧赤湯町では史跡として保存をすすめるとともに、赤湯町史において前方後円墳説を提示していた。しかし、4・5世紀に溯る主軸長約96mもの大型の前方後円墳が存在することについて、県内の考古学研究者の多くは、昭和50年代まで慎重な態度を取っていた。

昭和52年度（1977）に、山形県史編さん室・稲荷森古墳調査団等による測量調査（第3図）が実施されたことによって、ようやく稲荷森古墳は大型前方後円墳として認識された（註9）。ついで昭和53年度、54年度に実施された山形県立博物館による発掘調査（註10）により、稲荷森古墳は東北地方有数の規模を持つ古式の大型前方後円墳として、東北古代史の解明上重要な古墳であるとの認識を得るに至った。発見から半世紀を経て、ようやく稲荷森古墳は古墳としての脚光を浴びたのである。



第３図　稲荷森古墳公有地化前測量図

これらの結果、主軸長約96m、日本海側では北限の大型前方後円墳にあたることなどから、昭和55年（1980）５月24日付で稲荷森古墳は国の史跡指定を受けた。

2　山形県立博物館による発掘調査

昭和53年度、54年度に実施された山形県立博物館による稲荷森古墳の調査は、当古墳が国指定史跡に指定される契機となった重要な調査であった。昭和53年度の第一次調査は、周濠の有無と古墳の範囲を確定することを主たる目的として実施された。次いで昭和54年度の第二次調査では、古墳の墳丘造成法および古墳築造時期を明らかにすることを目的として実施された。

これらの調査の結果、多くの貴重な所見が得られ、この時点における認識として、主軸長約96m、４・５世紀型の日本海側では北限の大型前方後円墳であるという考え方が持たれることとなった。

3　公有地化事業

昭和58年度に、南陽市教育委員会では整備事業の第一歩として指定地内の民有地を公有化するため、国庫補助及び県費補助を受けて史跡稲荷森古墳土地買上事業を実施した。当事業は稲荷森古墳を公有地化することにより、農業用地開発や宅地開発から守り、史跡の適切な保護をはかるとともに、古墳本来の姿で永く後世に伝えることを目的としたものである。

地権者や地元の方々の多大な協力を得て、昭和59年（1984）、指定地10,182.7m²の内8,321.42m²を市有地とし、公有地化が完了した（第４図）。

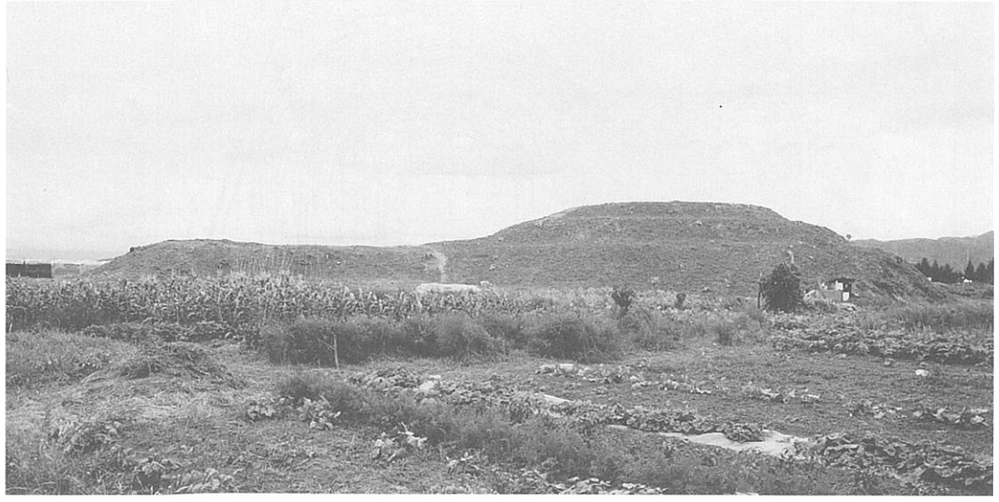
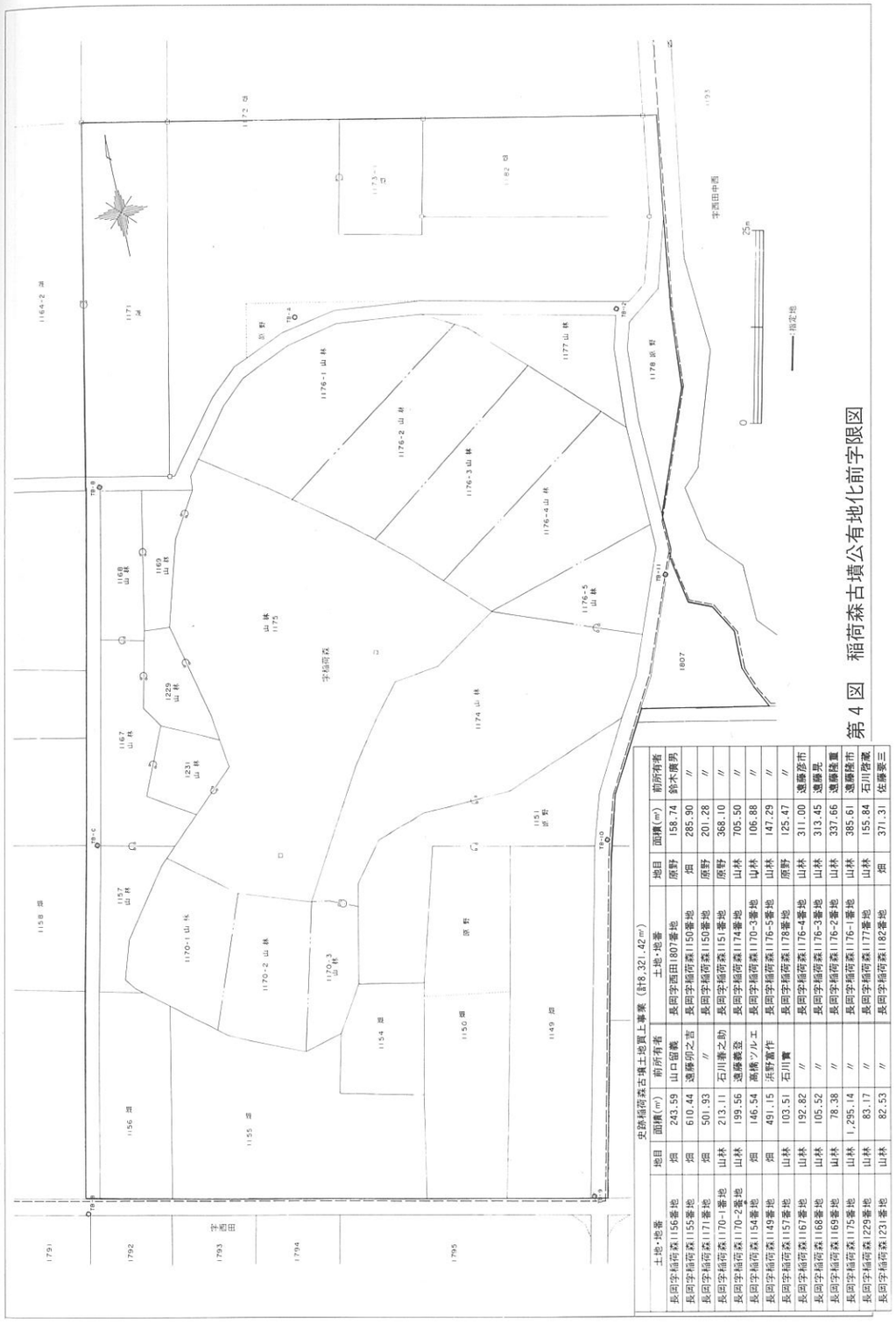


写真３　稲荷森古墳発掘調査前状況（東から）



第４図　稲荷森古墳公有地化前字限図

史跡稲荷森古墳土地買上事業（計8,321.42㎡）

土地・地番	地目	面積(㎡)	前所有者	土地・地番	地目	面積(㎡)	前所有者
長岡字稲荷森156番地	畑	243.59	山口留義	長岡字西田1807番地	原野	158.74	鈴木廣男
長岡字稲荷森155番地	畑	610.44	遠藤卯之吉	長岡字稲荷森150番地	畑	285.90	〃
長岡字稲荷森171番地	畑	501.93	〃	長岡字稲荷森150番地	原野	201.28	〃
長岡字稲荷森170-1番地	山林	213.11	石川清之助	長岡字稲荷森151番地	原野	368.10	〃
長岡字稲荷森170-2番地	山林	199.56	遠藤義登	長岡字稲荷森174番地	山林	705.50	〃
長岡字稲荷森154番地	畑	146.54	高橋ツル工	長岡字稲荷森170-3番地	山林	106.88	〃
長岡字稲荷森149番地	畑	491.15	浜野富作	長岡字稲荷森176-5番地	山林	147.29	〃
長岡字稲荷森157番地	山林	103.51	石川實	長岡字稲荷森178番地	原野	125.47	〃
長岡字稲荷森167番地	山林	192.82	〃	長岡字稲荷森176-4番地	山林	311.00	遠藤啓市
長岡字稲荷森168番地	山林	105.52	〃	長岡字稲荷森176-3番地	山林	313.45	遠藤晃
長岡字稲荷森169番地	山林	78.38	〃	長岡字稲荷森176-2番地	山林	337.66	遠藤陸貫
長岡字稲荷森175番地	山林	1,295.14	〃	長岡字稲荷森176-1番地	山林	385.61	遠藤陸市
長岡字稲荷森229番地	山林	83.17	〃	長岡字稲荷森177番地	山林	155.84	石川啓蔵
長岡字稲荷森231番地	山林	82.53	〃	長岡字稲荷森182番地	畑	371.31	佐藤要三

第５図　稲荷森古墳測量図

第３章　整備に係る発掘調査の概要

1　昭和62、63年度の発掘調査

稲荷森古墳指定地の公有地化事業の終了後、南陽市教育委員会では、昭和60年度に新たな測量調査を実施（第５図）するとともに、史跡整備の基礎資料を得るため、国庫補助及び県費補助により昭和62年度（1987）、昭和63年度（1988）と発掘調査（註11,12）を行った。

昭和62年度の第１次調査では、葺石・埴輪の有無や後世の改変状況、墳麓部残存状況の確認を主な目的として、後円部を中心に４地区（旧第４トレンチ再発掘，Ａ～Ｃ各区）について調査が実施された。ついで昭和63年度には第２次調査として上記の目的の他周濠の有無の確認を含め、前方部を中心に７地区（Ｄ～Ｊ各区）について調査を実施した（第６図）。

両年度の調査とも墳丘の保護をはかるため、基本的に表土剥離を中心とし、従前の調査地のみ再発掘・深掘を行った。

2　調査の結果

(1)墳丘・墳麓の改変状況

後円部の改変状況として、墳麓部北東の削平を受けた部分において墳丘の残存部が検出されたことは、墳麓部の保護を考える上で重要な意味をもった。また、後円部東側墳麓は、農道の造成等によって改変を受けたと確認され、崩落が進みつつあることから、早急な保護対策が必要となった。このため保存修理事業においては、法覆工等による修理が実施された。

この他に後円部墳頂や墳丘斜面では、通路や神社（祠）所在地等成因の明らかな人為的改変や、土壙・溝・性格不明遺構等築造後の様々な遺構が所々に検出された。

次に前方部およびくびれ部の改変状況としては、特に大規模な改変は見られず、墳麓部の残存状況は概ね良好であった。また、前方部墳頂南端西半には１段壇状に高くなった部分が確認されたことから、おそらく元々は部分的に２段築成の如き状況を呈していたものと考えられた。この部分的２段築成については、整備において、発掘調査のデータに基づき最小限の推定復元を行った。

以上、墳丘全体としては、小規模かつ部分的な改変は認められるものの、後円部北東部及び東部を除き残存状況はほぼ良好とみなされた。特に墳麓部の改変が少なかったことから墳麓線を設定のうえ、整備事業における立ち入り規制のための低木植栽等工事の基線とした。

(2)墳形

前方後円墳である。後円部３段、前方部１段（部分的に２段）の段築を有する。平面形態は、後

円部にくらべ前方部が短い、いわゆる銚子形を呈する。

(3)墳丘の規模

主軸方位N－30°10′－Eであり、現地表上では全長約96mである。後円部底径約62m、前方部長約34m、前方部南部の幅約30m、後円部高さ約9.6m、前方部南端の高さ約4m、同北半の高さ約3.5mを測る。後円部段築1段の高さは5m弱、2・3段は各2m強である。前方部段築第1段の高さは約3.5m、部分的な壇状の高まりの高さは約0.5m強で、古墳全体の盛土量は約9,000m³である。

(4)外部施設

周濠・葺石・埴輪は、今までの調査では検出されていないことから、ないものとみなされる。

(5)内部主体

未調査である。昭和62年度Aトレンチでは、表土剥離による調査が中心であり、内部主体に係るプラン等は把握されていない。

(6)築造法と整地跡

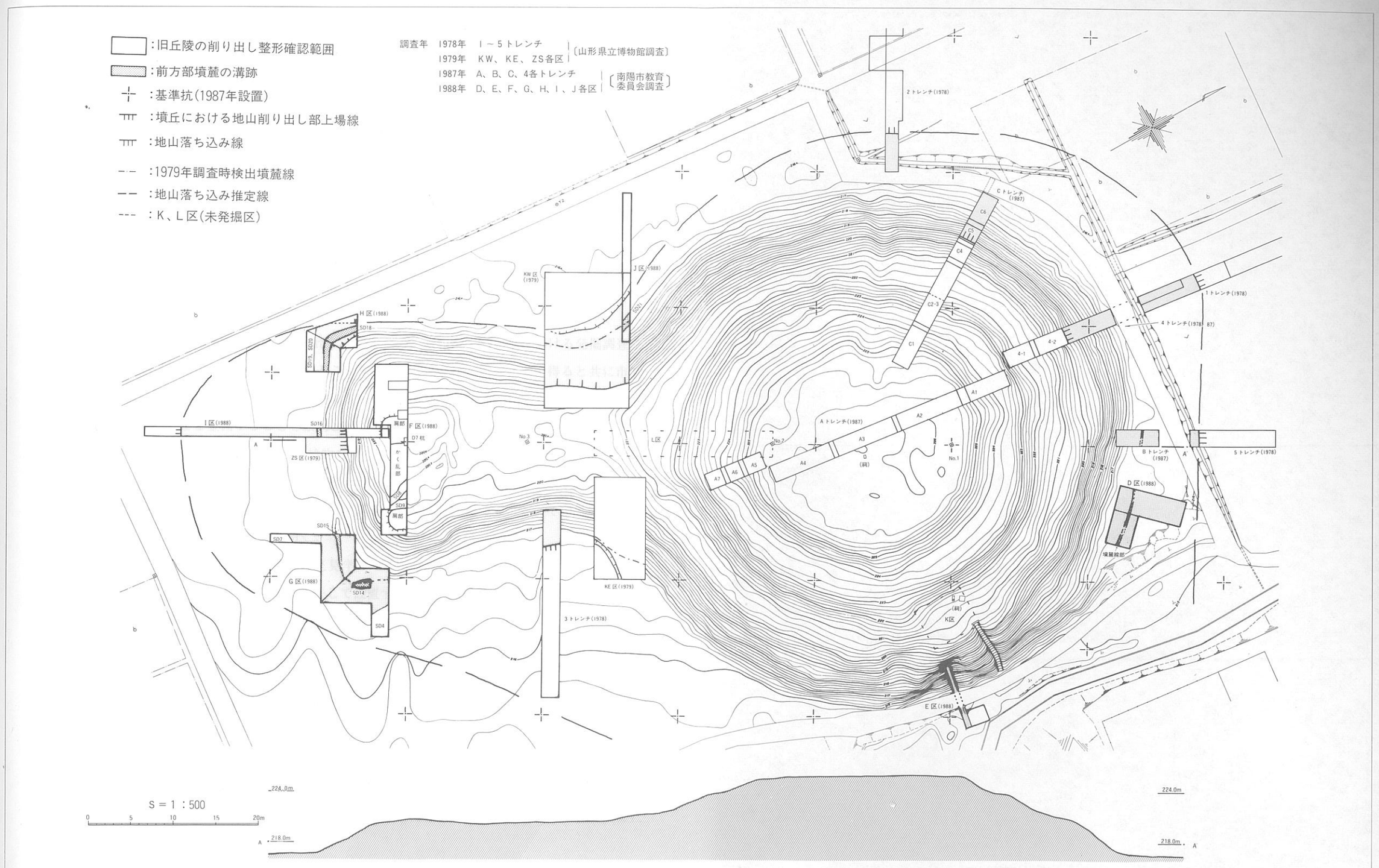
旧丘陵の西南端部を切断（後円部東側付近）のうえ、切り離した丘陵周辺を削平、整地して平面形を造るとともに、後円部第1段目と前方部の大部分を削り出して整形して造っている。削平を受けずに残った旧丘陵の地山層が、落ち込み状に現墳麓から1～16.5mの所に確認され、これらの内側（墳丘側）では、平坦な地山が古墳時代の整地跡として認められる。したがって、整備にあたってはこの整地跡の範囲ではできるだけ改変を行わない方針で進められた。

また、旧丘陵表土層の上に互層状に盛土を行っていることが確認されており、後円部の第1段の一部および第2・3段目、ならびに前方部上半を盛土により造成していると考えられる。

なお、後円部東側における旧丘陵との切断部分の幅は、従来は、約8m程度の小規模なものと考えられてきたが、平成4年度に実施された長岡山遺跡分布調査（註13）の試掘の結果、およそ18～20mもの切り離しを行っていることが判明した。

(7)古墳築造の年代

主体部の位置・規模・内容等未調査のため築造年代を直接示す資料はないが、後円部出土の高坏および底部穿孔壷の時期と墳形からみた年代を合わせ考えれば、稲荷森古墳の築造は、4世紀後葉とみなすことが現段階では妥当と思われる。



第６図　稲荷森古墳調査全体図

第４章　保存修理事業

１　全体計画

(１)基本計画

① 計画の目的

山形県では最大であり東北地方第６位の規模を持つ稲荷森古墳は、当地方の歴史を理解するうえで極めて大切であり、また、東北古代史の解明上重要な位置を占めることから、周辺の歴史的環境の整備推進を図ると共に、当古墳の現状をふまえて適切な保存をめざし、あわせて多くの人々に永く親しまれる史跡公園として整備し活用を図ることを目的とする。

② 整備基本計画

南陽市教育委員会では、保存修理事業を円滑に進めるため、昭和62・63年度における発掘調査の結果及び積雪量並びに周辺が果樹園・畑であることなどをふまえ、国・県の指導を得ると共に市文化財保護審議会等との協議を経て最終的に次のように基本計画を作成した。

ア．墳丘部は、現状のまま整備することを原則とし、後世に設置された祠・石段の撤去及び崩落箇所の盛土・整形を行う。墳丘面は自生植物を中心に緑化を図り、表面保護を行う。このため、墳頂部肩及び墳麓部に低木を巡らせて立入りを規制し墳丘自生植物と墳丘面を保護する。

イ．墳麓線については、発掘調査により判明した墳麓線及び墳麓推定線を元とし、その外側で整備を行うことにより、墳丘への改変を防ぐ。

ウ．前方部と後円部の両墳頂部には盛土のうえ見学スペースを設け、それぞれに通じる見学路の階段は、景観及び墳丘を傷めないように工夫して設置する。後円部墳頂に方位盤を設ける。

エ．墳丘部東南隣側に入口広場を設け、その内に史跡名称碑や説明看板（案内板・解説板）及びベンチ等を設置する。

オ．古墳周辺の平地部には盛土をし、周囲にマッチした低木と高木を植栽し、手洗い・水飲・四阿・ベンチ及び散水栓等を設置のうえ、張芝にて整備を行う。

カ．周辺平地部に暗渠を設け、雨水等が指定地周辺の果樹園等に流れ込まぬようにする。

キ．平地部には、遺構があるため大規模な造成は行わず、掘り下げ等の工事は最小限とし、また、入口広場や便所・古墳広場・その他の施設についても地下の遺構等に影響を及ぼさないよう嵩上げ盛土をし造成する。これらに使用する諸材料及び樹種等は、史跡にふさわしい景観と風土性を表すものを使用する。

ク．指定地北西部に県内大型古墳の学習コーナーとして、古墳広場を設ける。

ケ．埴輪・葺石等の有無、後代の削平跡の確認、墳形状況・テラス・周濠の有無等の確認のための

第１表　事業費精算表

(1)収入の部

事業名	史跡稲荷森古墳土地買上事業	史跡稲荷森古墳発掘調査事業	史跡稲荷森古墳保存修理事業							合　計
	昭和	昭和	昭和	保存修理工事実施年度					計	
	58年度	62年度	63年度	平成元年度	平成２年度	平成３年度	平成４年度	保存修理工事		
事業概要	指定地公有地化	発掘調査	発掘調査	保存修理	保存修理	保存修理	保存修理	年度分小計		
国庫補助	18,195,000円	2,000,000円	2,000,000円	3,543,000円	5,000,000円	15,000,000円	17,000,000円	40,543,000円	42,543,000円	62,738,000円
県費補助	2,274,000円	1,000,000円	1,000,000円	1,771,000円	2,500,000円	7,500,000円	8,500,000円	20,271,000円	21,271,000円	24,545,000円
市　費	2,275,000円	1,000,000円	1,000,000円	1,772,400円	2,500,000円	7,500,000円	8,500,000円	20,272,400円	21,272,400円	24,547,400円
合　計	22,744,000円	4,000,000円	4,000,000円	7,086,400円	10,000,000円	30,000,000円	34,000,000円	81,086,400円	85,086,400円	111,830,400円

(2)支出の部

事業名	史跡稲荷森古墳土地買上事業	史跡稲荷森古墳発掘調査事業	史跡稲荷森古墳保存修理事業							合　計
年　度	昭和	昭和	昭和	保存修理工事実施年度					計	
	58年度	62年度	63年度	平成元年度	平成２年度	平成３年度	平成４年度	保存修理工事		
事業概要	指定地の公有地化 買上面積8,321.42m²	発掘調査	発掘調査	暗渠排水・水道管敷設 祠等撤去、平坦部盛土	入口広場工、盛土、階段工 ト　法覆工、張芝	張芝、高・低木植栽、古墳 広場、四阿、方位盤等設置	張芝、高・低木植栽、トイ レ、説明板、境界杭等設置	年度分小計		
用地買収	22,744,000円									22,744,000円
発掘調査費		4,000,000円	4,000,000円						4,000,000円	8,000,000円
工事請負費				5,510,500円	8,552,090円	28,170,500円	30,107,930円	72,341,020円	72,341,020円	72,341,020円
委託料				1,421,400円	1,287,500円	1,751,000円	2,626,500円	7,086,400円	7,086,400円	7,086,400円
事務費				154,500円	160,410円	78,500円	1,265,570円	1,658,980円	1,658,980円	1,658,980円
合　計	22,744,000円	4,000,000円	4,000,000円	7,086,400円	10,000,000円	30,000,000円	34,000,000円	81,086,400円	85,086,400円	111,830,400円

市単独事業(参考)	草刈等	草刈・芽刈	草刈・芽刈、縦横断測量 基本構想・設計作成	草刈・芽刈、整備基本設計 作成、空中写真撮影	草刈・芽刈、隣接駐車場 基本構想、取付道路造成	植栽管理委託、駐車場用地 買収及基本設計	植栽管理委託、駐車場造成 空中写真撮影、リーフ印刷 小看板・農道整備

第２表 史跡稲荷森古墳保存修理工事年次割表（各工事の金額は直工分）

年度	土　工　事	園路工事	管理施設及び給排水工事	教養施設工事	修景施設工事	休養施設工事	雑工事	直工計	共通仮設費	諸経費	工事請負費合計
平成 元年	機械掘削　56m³ 機械盛土 432m³ 購入土　376m³ 1,775,296円		法面復旧工 筋芝工　5m² 給水工 水道埋設工 339m 水道管布設 344m 散水栓　5個所 排水工 暗渠工　324m 集水桝　3個所 1,611,919円					3,387,215円	準備費 祠移設 2個所 23,500円 226,500円	1,896,785円	5,510,500円
平成 2年	機械掘削　9m³ 機械盛土 854m³ 人力盛土　2m³ 購入土　871m³ 2,321,677円	階段工　55段 路面工 クレイ舗装 384m² 地先境界ブロック 35m 砕石敷均し　4m² 石張舗装　57m² 1,403,717円	法覆工 築立　116m² 筋芝　116m² 種子吹付工 101m² 206,311円		張芝工 1,550m² 1,424,450円			5,356,155円	1,192,712円	2,003,223円	8,552,090円
平成 3年				方位盤　1基 古墳広場工 タイル舗装 130m² タイル　125m² 絵陶磁板　47枚 古墳ミニチュア 4基 10,303,878円	張芝　1,923m² 植栽工 ケヤキ　2本 ヤマザクラ　4本 ドウダンツツジ 564本 生垣支柱　188m 3,299,667円	四阿　1基 ベンチ　6基 6,266,074円		19,869,619円	2,535,000円	5,765,881円	28,170,500円
平成 4年	購入土盛土 66m³ 130,350円	石張工　10m² 43,080円	水飲み　1基 転落防止柵　76m 基礎ブロック 39基 便所建設工　1式 12,916,200円 14,625,821円	説明板　2基 史跡標識　1基 4,408,745円	張芝　962m² 植栽工 ヤマザクラ　2本 エドヒガンザクラ 2本 ドウダンツツジ 1,664本 ベニカナメ　303本 生垣支柱　656m 5,758,961円	四阿内レンガ舗装 12m² 167,448円	敷き砂利　4.2m³ 境界杭設置 10本 121,172円	25,255,577円	2,045,000円	2,807,353円	30,107,930円
計	4,227,323円	1,446,797円	16,444,051円	14,712,623円	10,483,078円	6,433,522円	121,172円	53,868,566円	5,999,212円	12,473,242円	72,341,020円

発掘調査を行ったことから、この結果の内有効な資料は活用を図る。

市単独費分（参考）

① 指定地南側の市道を改良し、古墳へのアプローチとする。

② 入口広場及び便所に隣接するように、古墳東南部（指定地外）に駐車場を設ける。

③ 維持管理として、丈の低い自生植物を養生することで墳丘面の崩落防止と保護を図るため、墳丘の草刈を行い、芽摘み・皮剥ぎによる残根の枯死化を図ると共に、平坦部の草刈、芝刈り、植栽の手入れを行い、あわせて施設設備の維持管理を図る。

(2)実施計画

① 事業費精算

事業費の収入・支出については、第1表のとおりである。

② 保存修理工事事業年次計画

整備開始の平成元年度から2年度にかけては土工事等を中心とし、同3～4年度は施設工事を主体として実施した。植栽工事は2～4年度にわたり行った（第2表）。

③ 実施体制

事業の実施にあたり、文化庁文化財保護部記念物課及び山形県教育庁文化課の指導をいただいた。

昭和63～平成元年度　文化庁主任文化財調査官安原啓示先生、同文化財調査官加藤允彦先生

平成2～4年度　文化庁主任文化財調査官田中哲雄先生

事業は、南陽市都市計画課が工務担当（安彦　博計画係長、安部史生建築係長）となり、つぎの事務局体制により実施した。

教育長　渋谷幸一(昭和63～平成3年度)

佐野欽一(平成4年度)

教育参事　高山和夫(平成3～4年度)

社会教育課

課　長　渡部昌久(昭和63～平成3年度)

菅　利夫(平成4年度)

課長補佐　熊坂善行(昭和63年度)

米　秀一(平成元年度)

恩地祐助(平成2年度)

山口光幸(平成3～4年度)

社会教育課

文化係

係　長　菅野　章　(昭和63～平成元年度)

吉野一郎　(平成2～4年度)

主　任　井上紗智子(平成3年度)

主　事　大道寺祝子(昭和63～平成2年度)

主　事　高田美佐子(平成4年度)

主　事　角田朋行　(平成2～4年度)

学芸員　吉野一郎　(昭和63～平成元年度)

④ 工事関係者　(平成元～4年度)

実施設計業務　財団法人　山形県都市整備協会　(担当 佐藤謙司技師)

施　工　業　者　加藤組株式会社

第7図　稲荷森古墳保存修理工事全体図

2　保存修理工事の概要

(1)土工事

① 平地部盛土・整地工事　（平成元年度～２年度施工、第８図～第11図）

墳丘周辺の平地部は、元々畑地であったため畝跡等が残っており、見学等にふさわしくない地形状況を呈していたうえ、古墳時代以降の遺構が存在することが判っていた。これらに対応すると共に排給水及び諸施設の配備や史跡としての効果的な活用に資するため、縦横断測量の結果に基づき平地部（墳麓線の外側）に盛土を行った。土は花崗岩真砂土を使用した。

② 墳頂部盛土工事　（平成２年度施工、第８図～第12図）

前方部及び後円部の両墳頂部に園路として見学スペースを設けるため、また、前方部頂から後方部頂に至る階段を設けるため盛土を行った。盛土は花崗岩真砂土を使用し、すりつけ部分は墳丘の色と調和を図るため類似土で仕上げた。墳頂部へ土や小型機械を運び上げるときに墳丘をいためぬよう、くびれ部東斜面に盛土による仮設斜面を設けて墳丘の保護を図った。敷均しは人力で行い締固めは振動ローラとタンパにより行った。盛土厚は、本古墳の横からのシルエットと景観に影響が少ないように最小限とした。

後円部では仮設中心点から３％の勾配をつけて雨水対策とし、盛土範囲は法肩まで半径９ｍとして法尻は現墳頂肩付近にすりつけた。

前方部は、主軸に対しやや東にねじれていることから、主軸線より３度東に前方部用の仮設主軸線を設け、これから東西各々３度の勾配をつけた。南端部には部分的に高まりが存在し、その東半は後世の改変を受けたとの調査所見（註14）から、西半部分の保護と見学スペースの確保のため、法肩間８×７ｍの長方形状に盛土を行った。法尻は現墳頂肩にすりつけた。

両墳頂では、表土流失防止等のため粘土６：砂４の比率の土及び表層安定剤の $CaCl^2$ と細目化粧砂を材料として締固めを行うクレイ舗装仕上げとした。

後円部頂に至る階段部分では、盛土幅は法肩間４ｍとした。景観上盛土厚は最大30ｃｍとし、全体的に薄くした。段築のテラス部分は階段を設けないため薄く盛土した。

(2)法覆・筋芝工事（墳丘部修復工事　平成２年度施工、第13図，第15図）

稲荷森古墳は比較的保存が良好であることから、墳丘に係わる修復については、後世の改変を受けた所の内、墳丘面が定着していて崩落が現状以上に進まぬものを除き、とくに崩落が進行しており修復が緊要なもののみ実施した。各作業中は社会教育課担当職員が立会い、慎重に工事を進めた。なお、本来は法面の基盤を段切して盛土することが滑落防止上有効であるが、墳丘の保護のためこれは行わぬこととした。

最も崩落の進行が著しい後円部東側では、周辺斜面一帯がおそらく東側農道造成時に広く改変を

受けたものとみられており（註15）、はじめに崩落堆積土を除去して改変を受けていない墳丘面を露出させた。次に、法尻となる墳麓線を平面図から割り出して設定のうえ、修復部分全体にメッシュ状に丁張をかけて法面すりつけと周囲墳丘面との調整を図り、修復後の墳丘面のふくらみが周囲と比べ異和感がないようにした。勾配については、後円部段築第１段斜面全体の墳丘勾配は概ね30°程度であるのに対し、当該地一帯は、改変によるためか約40°であるため、仕上げも概ねこれに合わせた。盛土は類似土（山砂）を使用し、15ｃｍ厚を単位として敷均しを行うと共に人力及びタンパによる締固めを繰りかえした。なお、盛土の滑落防止として木杭打工（直径100m／m，長さ500～1,200m／m）も行った。法面には30ｃｍ厚ごとに筋芝工を施した。

後円部東側にあった祠三基は指定地外に移転すると共に石段も撤去し、土羽打ち（筋芝）により復旧した。

後円部西側斜面の墳麓から墳頂までの小道は、崩落土を除去のうえ、敷均しと締固めを繰り返し、筋芝工を施した。法面は、周囲墳丘面との調整を図って仕上げた。

昭和62～63年度の調査区の内、表土がやや崩落しているトレンチ跡について、周囲に合せて盛土のうえ、自生植物に近い組合せで３種混合種子吹付を行った。

(３)給排水工事　（平成元年度施工　第14図～15図）

墳丘からの雨水及び平地部の雨水対策として墳丘をとり囲むように暗渠を設け、指定地東隣の長岡堰に導くこととした。管は集束暗渠管（Ｓドレン）の直径100m／m及び150m／mのものを使用した。

給水工としては、手洗い及び水飲み並びに張芝・低木等植栽の灌水用散水栓のために、直径30m／mの硬質塩ビ製水道管344mを使用し、南側市道の本管から１系統で引込んだ。合せて散水栓５基を設けた。

これらの工事における掘削時は慎重に作業を進めると共に社会教育課担当職員が立会った。

(４)園路工事　（第15図～17図）

①　階段工事　（平成２年度施工）

指定地内のうち、平地部では入口広場からくびれ部東側までは園路を設け誘導することとしたが、他域については自由に芝生を散策できるようにとくに園路は設定しなかった。墳丘においては、くびれ部両側から前方部に上がり、次に後円部に至る動線とした。

入口広場からくびれ部東側階段に至る園路は、砂利（０～40のクラッシャーラン、厚さ10ｃｍ）を人力で敷均しした。

墳丘に設けた階段は、ＰＣ擬木（早強ポルトランドセメント製）を使用し、横木は直径10ｃｍ長さ２ｍのものを、また、これを支える立杭は同径で長さ０.５ｍのものを使用した。立杭間の距離は１.３ｍとした。踏面は花崗岩真砂土を人力敷均しのうえタンパで締固めし、墳頂部盛土と同様に表面はクレイ舗装仕上げとした。

面を
ッシ
囲
既ね
これ
及び　長

より

返し、

盛土

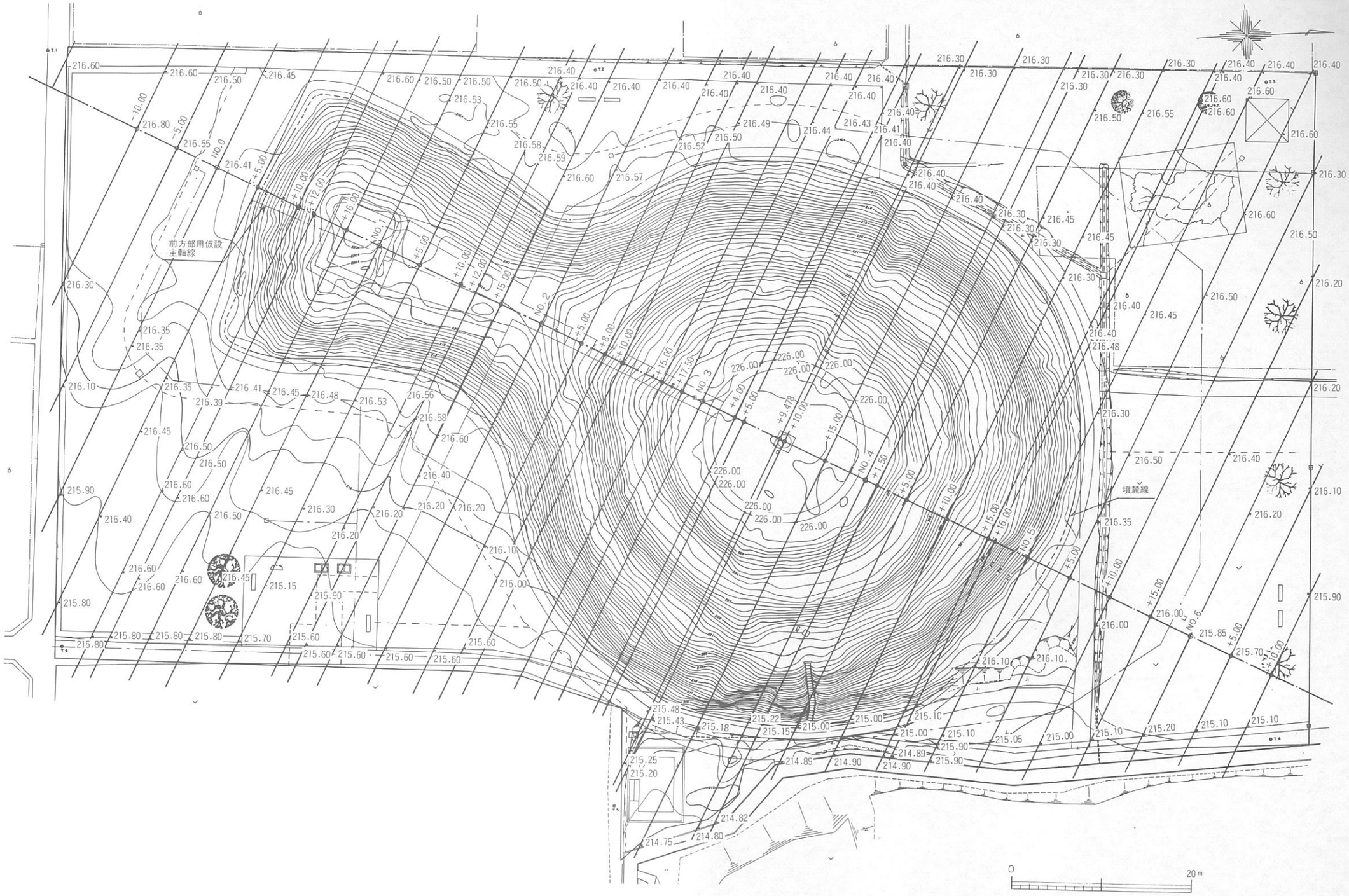
の長
を使

／m
けた。

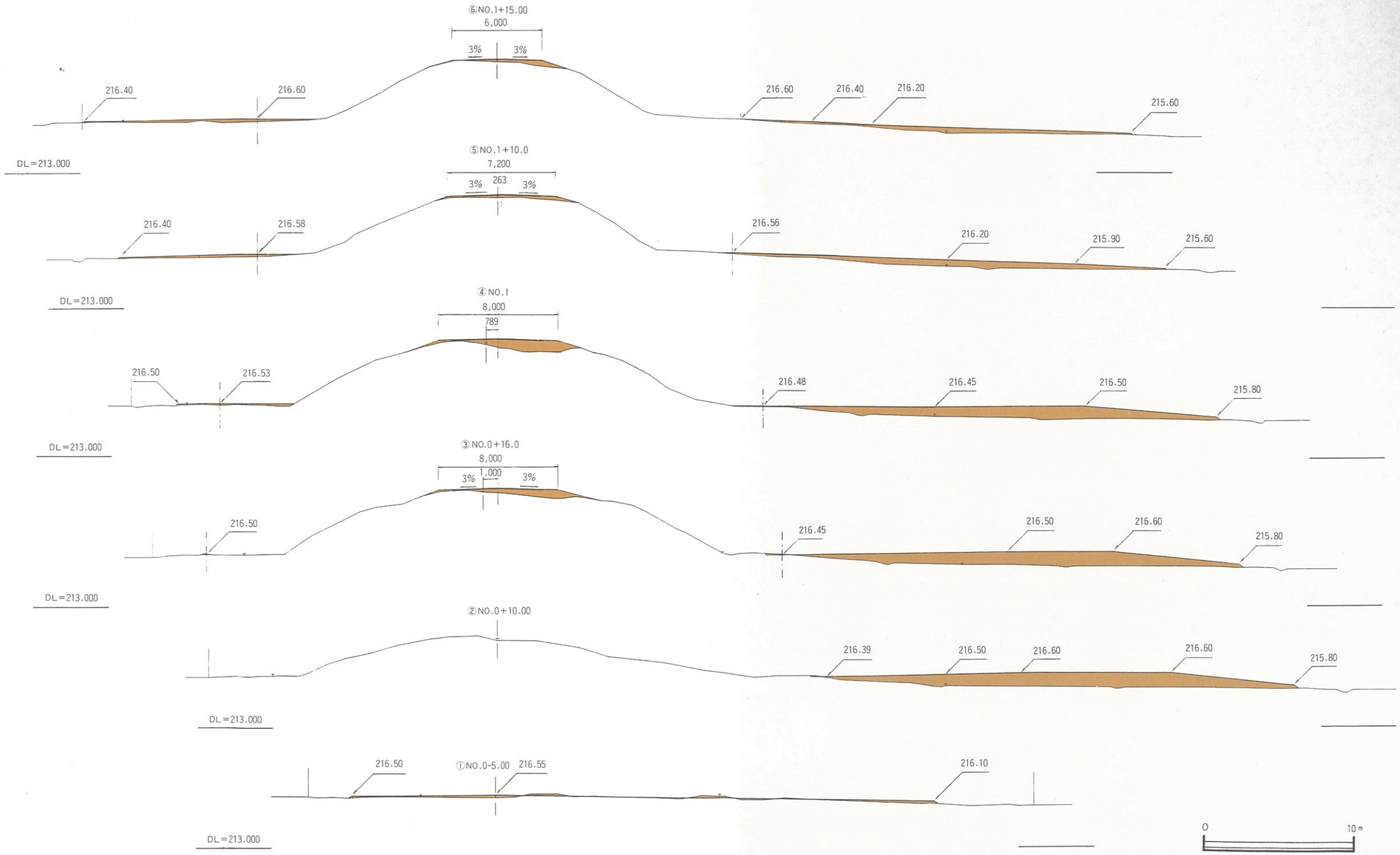
たが、
、く

：m）

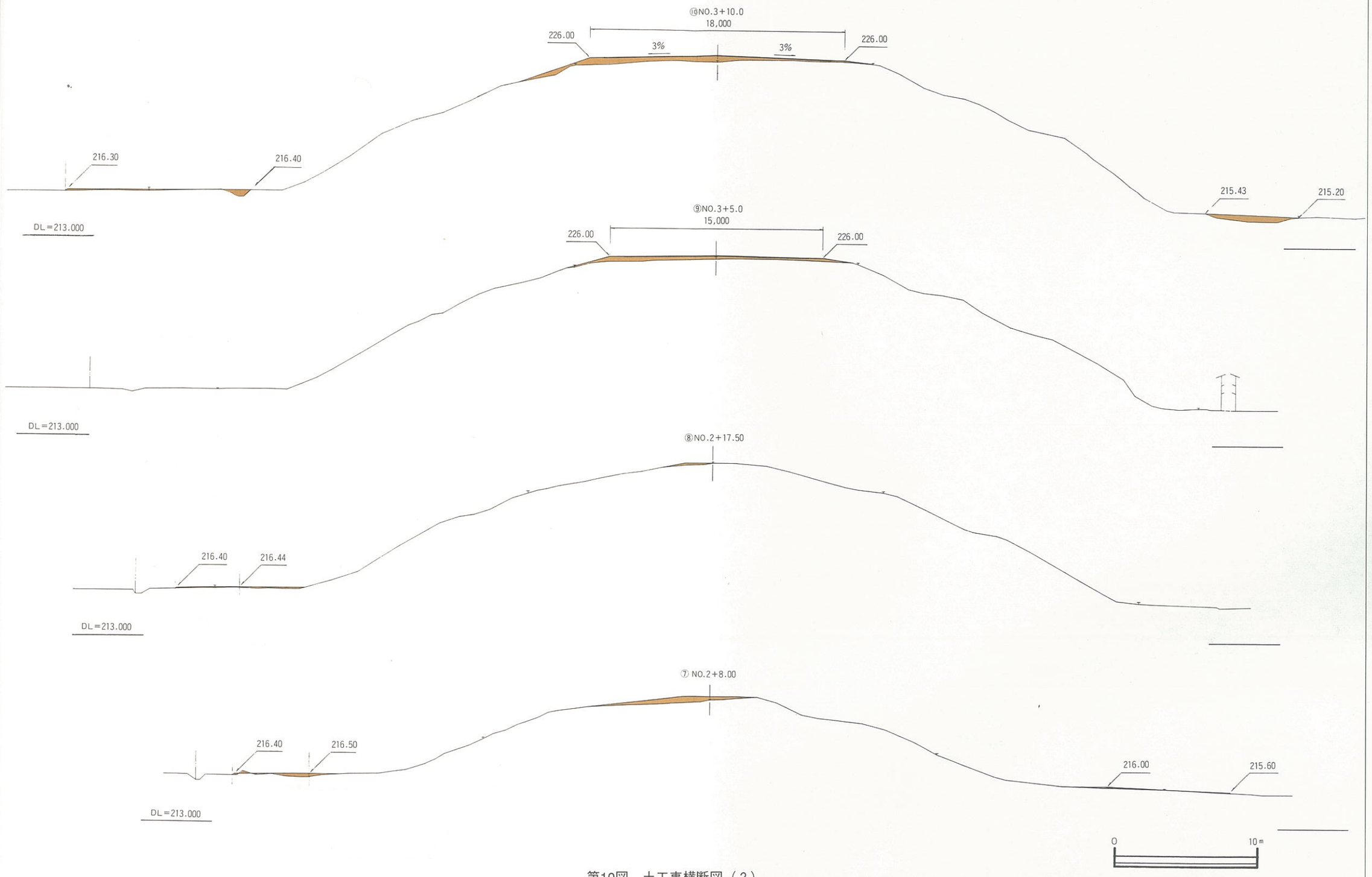
m長
距離
同様



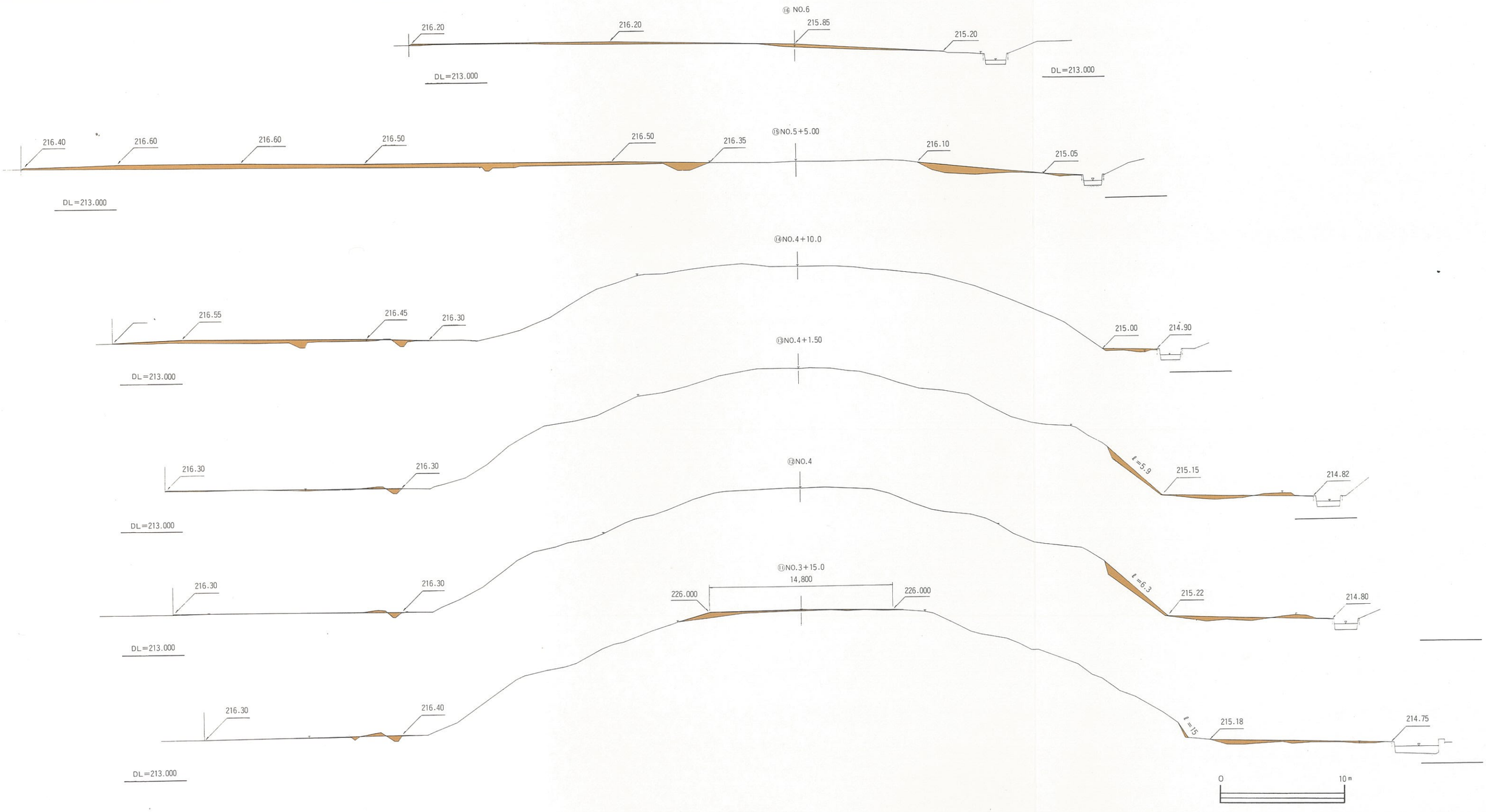
第８図　土工事平面図


⑥NO.1+15.00
6,000
3%
3%
216.40
216.60
216.60
216.40
216.20
215.60
DL=213.000
⑤NO.1+10.0
7,200
3%
263
3%
216.40
216.58
216.56
216.20
215.90
215.60
DL=213.000
④NO.1
8,000
789
216.50
216.53
216.48
216.45
216.50
215.80
DL=213.000
③NO.0+16.0
8,000
3%
1,000
3%
216.50
216.45
216.50
216.60
215.80
DL=213.000
②NO.0+10.00
216.39
216.50
216.60
216.60
215.80
DL=213.000
216.50
①NO.0-5.00
216.55
216.10
DL=213.000
0
10m

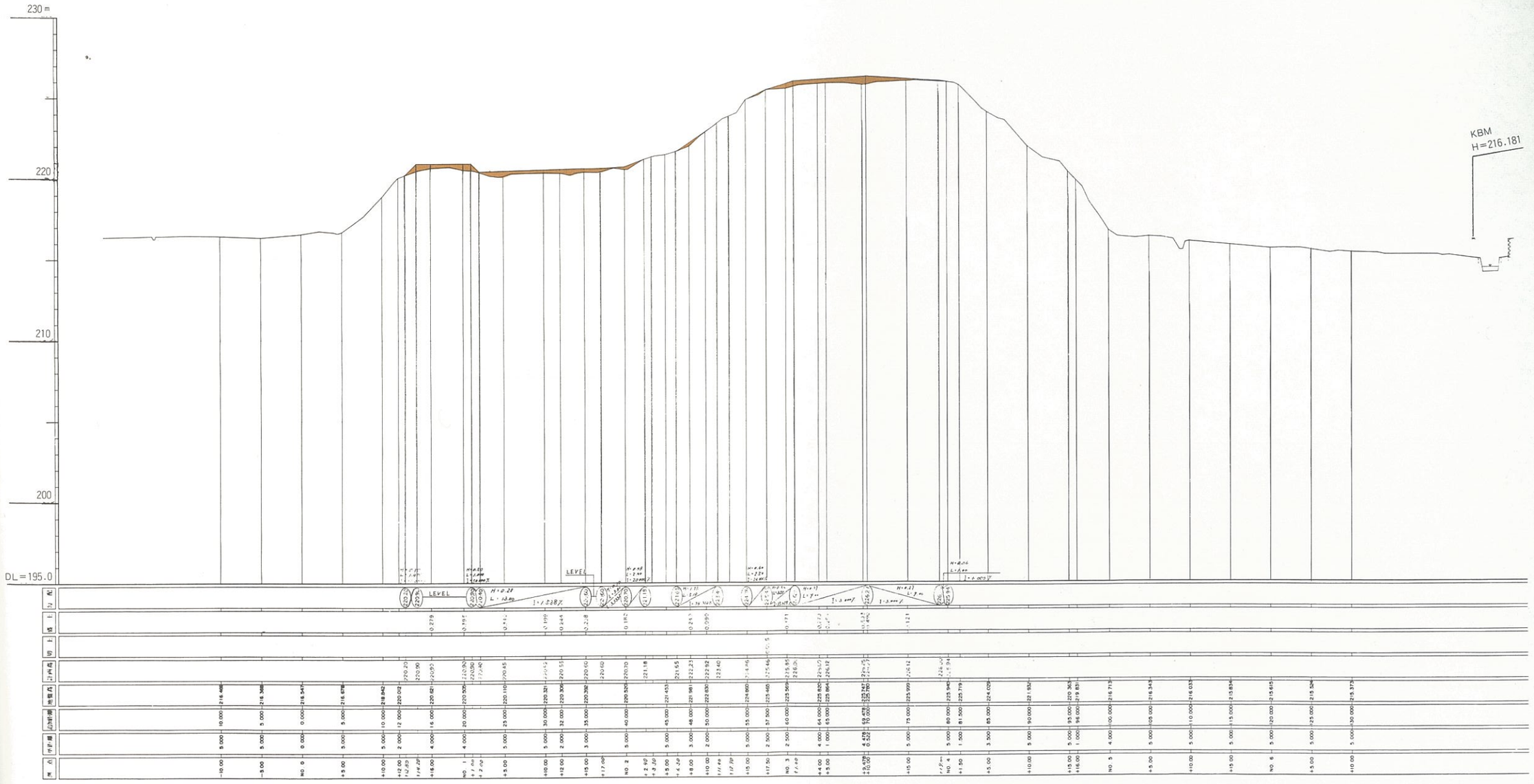
第９図　土工事横断図（１）



第10図　土工事横断図（２）



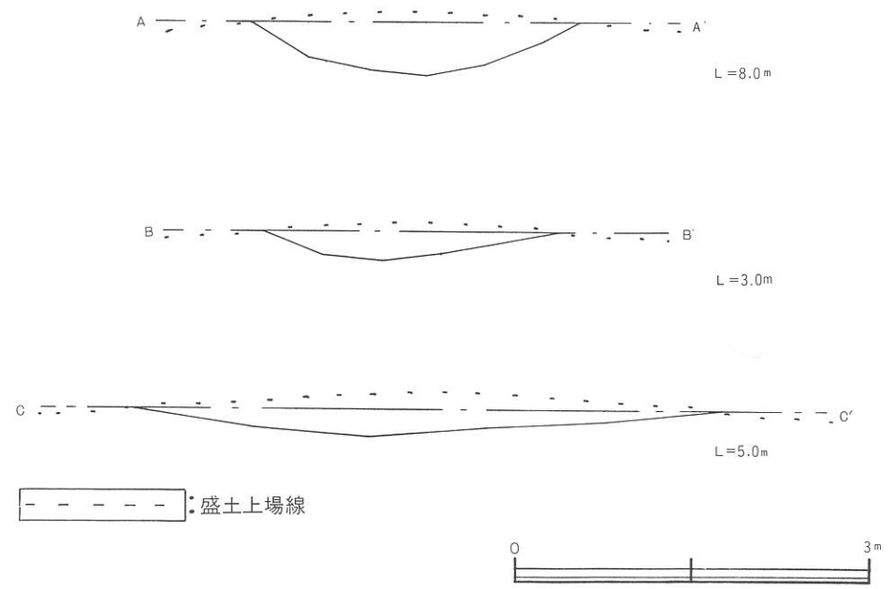
第11図　土工事横断図（３）



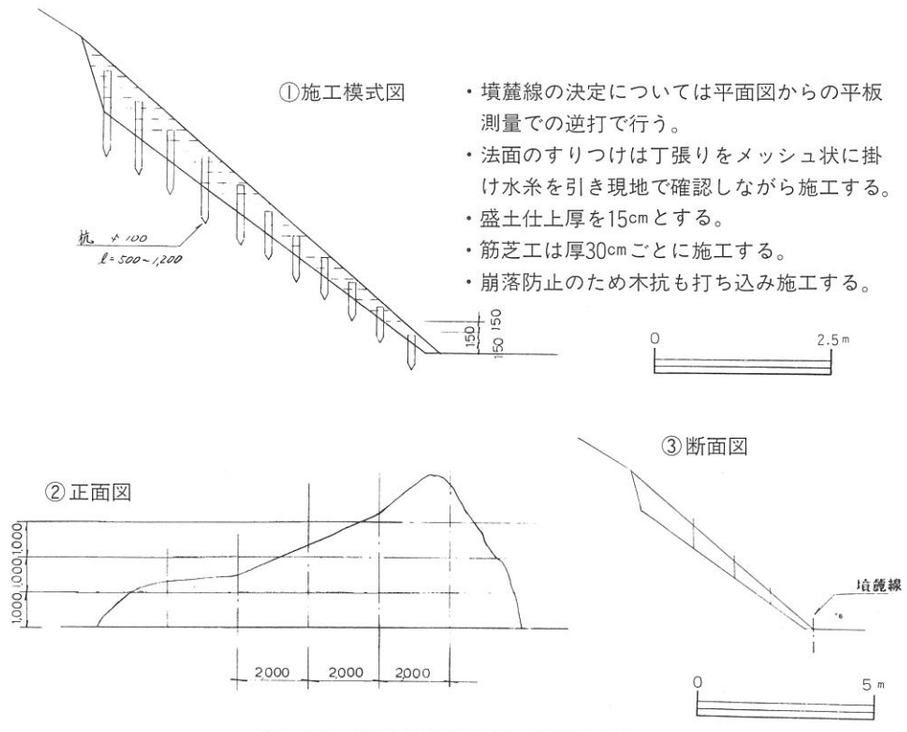
縮尺（垂直方向）V＝1/300
（水平方向）H＝1/600

第12図　墳丘土工事縦断図

(1)後円部西側盛土修復か所平均断面図



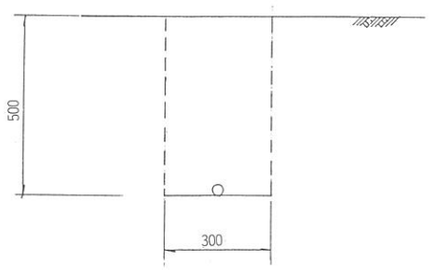
(2)後円部東側盛土修復か所詳細図



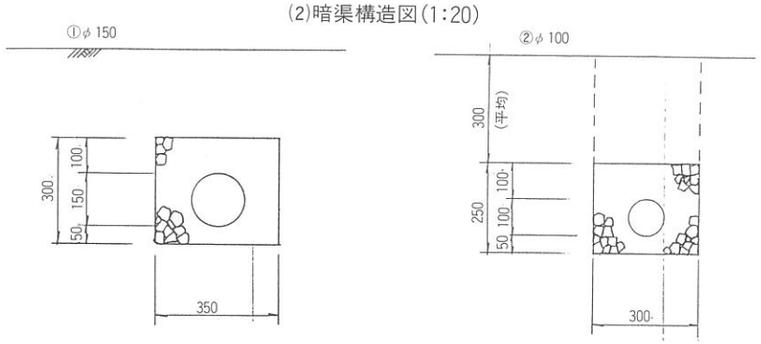
- 墳麓線の決定については平面図からの平板測量での逆打で行う。
- 法面のすりつけは丁張りをメッシュ状に掛け水糸を引き現地で確認しながら施工する。
- 盛土仕上厚を15cmとする。
- 筋芝工は厚30cmごとに施工する。
- 崩落防止のため木杭も打ち込み施工する。

第13図　後円部盛土修復か所詳細図

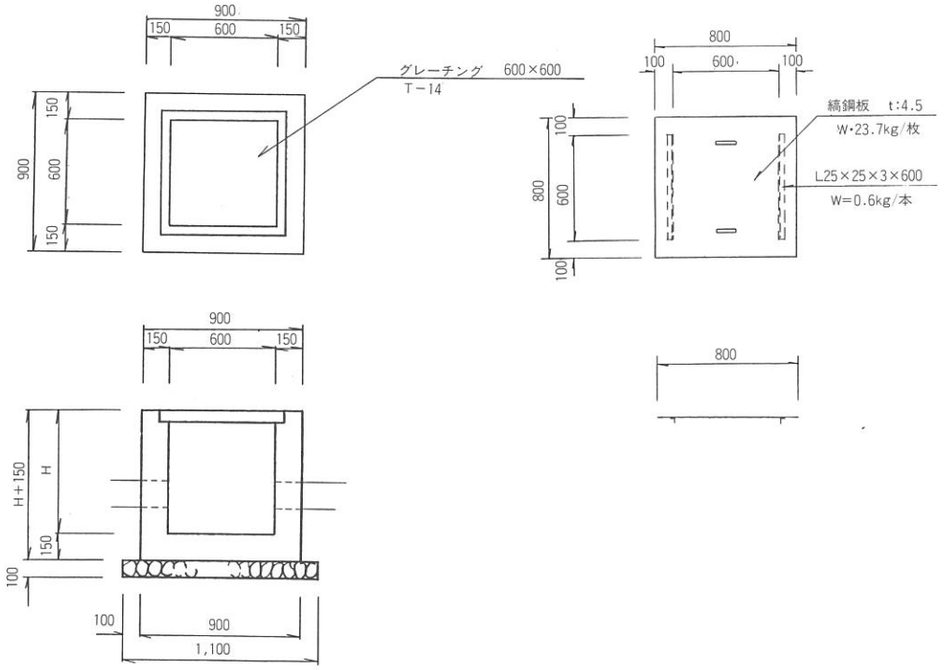
(1)給水管施設図(1:20)



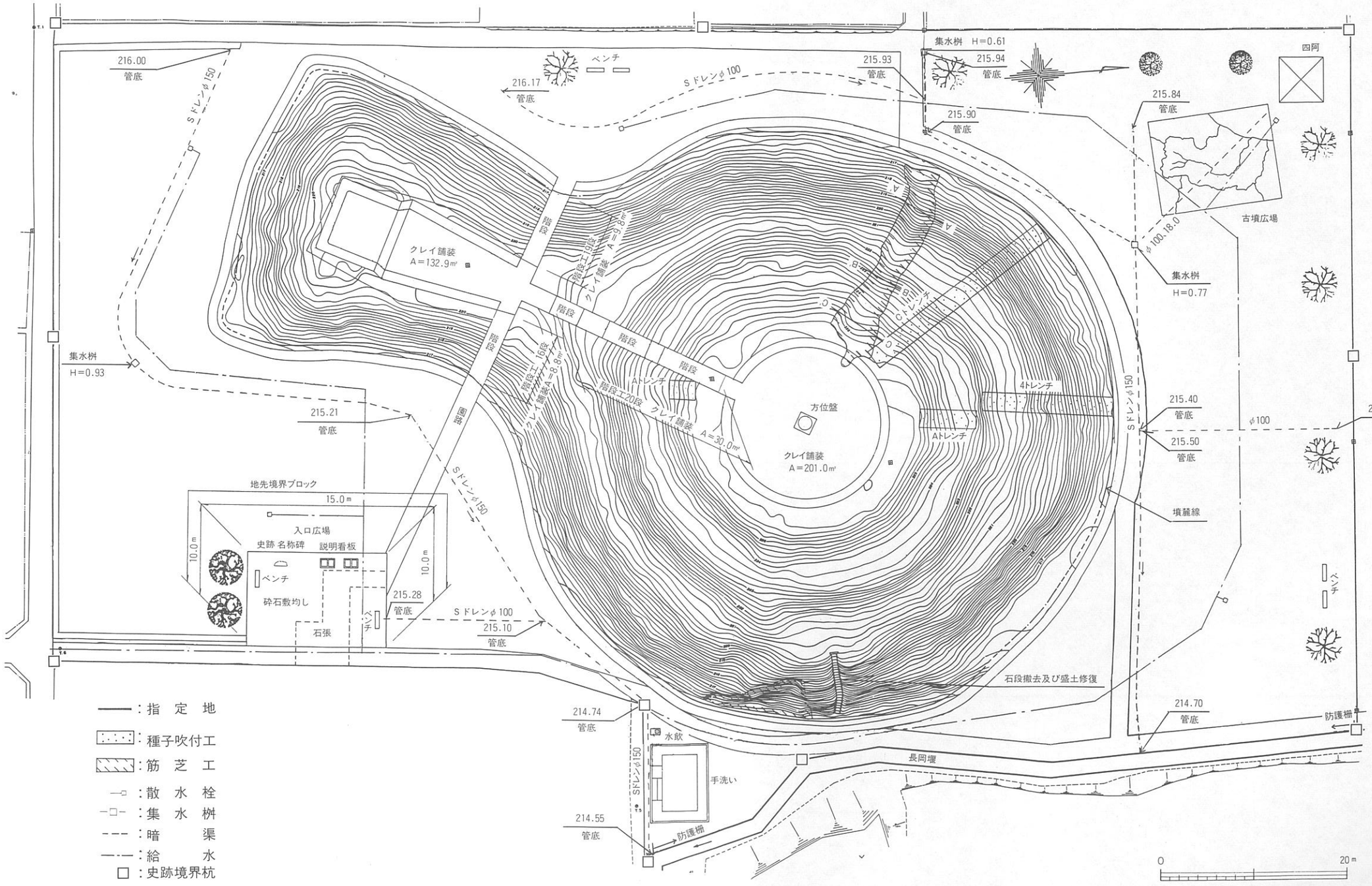
(2)暗渠構造図(1:20)



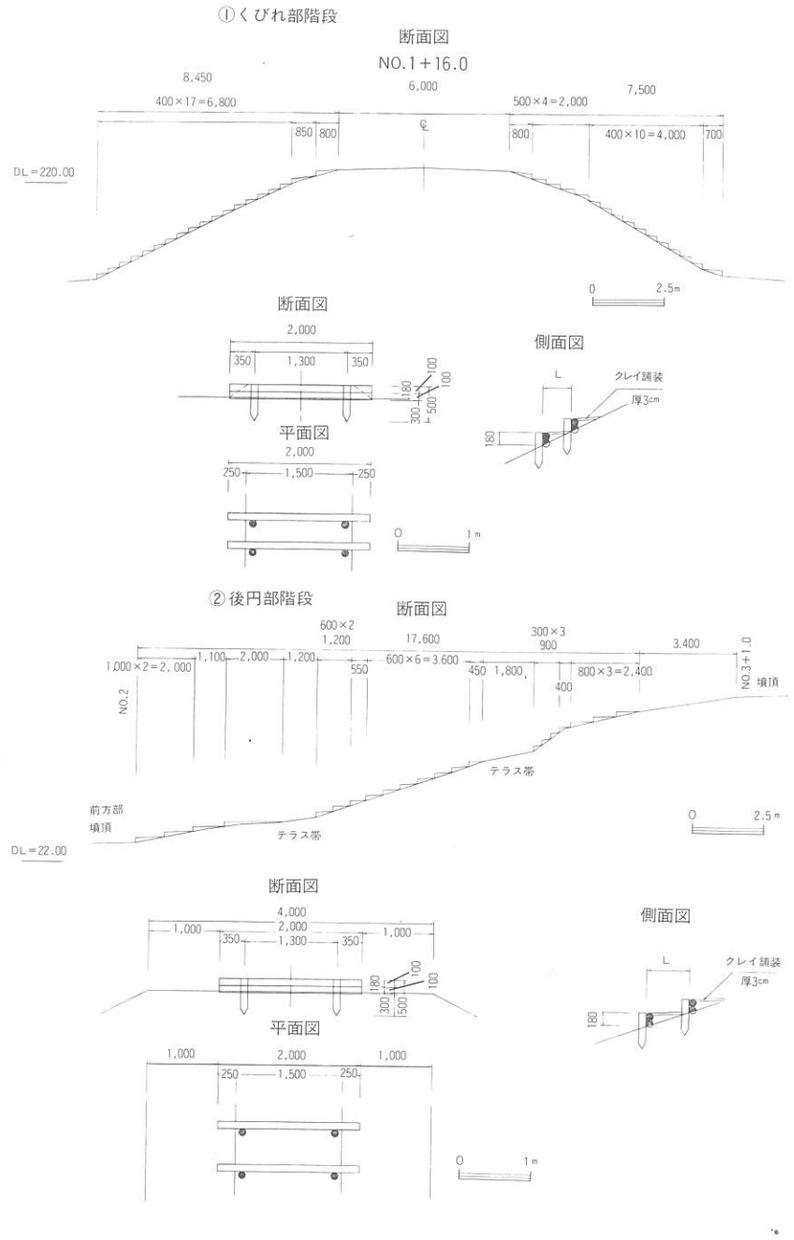
(3)集水桝構造図(1:40)



第14図 給水工・排水工詳細図



第15図　給排水工・法覆工・階段工・路面工・管理工平面図


①くびれ部階段
断面図
NO.1＋16.0
8,450
400×17＝6,800
6,000
500×4＝2,000
7,500
850
800
800
400×10＝4,000
700
DL＝220.00
0
2.5m
断面図
2,000
350
1,300
350
100
100
180
300
500
側面図
L
クレイ舗装
厚3cm
180
平面図
2,000
250
1,500
250
0
1m
②後円部階段
断面図
600×2
1,200
17,600
300×3
900
3,400
1,000×2＝2,000
1,100
2,000
1,200
550
600×6＝3,600
450
1,800
400
800×3＝2,400
NO.3＋1.0
NO.2
墳頂
テラス帯
前方部
墳頂
テラス帯
DL＝22.00
0
2.5m
断面図
4,000
2,000
1,000
350
1,300
350
1,000
100
100
180
300
500
側面図
L
クレイ舗装
厚3cm
180
平面図
1,000
2,000
1,000
250
1,500
250
0
1m

第16図　階段工詳細図

くびれ部両側の階段では踏面は丸太を含め概ね40ｃｍ、蹴上高は18ｃｍを基本としたが、現墳丘面に掘り込ませずその傾斜に合せて施工のうえ基盤の盛土厚も薄いため、全て同寸法にはならなかった。階段数は西側19段、東側１６段である。

くびれ部から後円部頂に至る階段は、段築テラス部分を除いた斜面にのみ合計21段設け、踏面は概ね60ｃｍ、蹴上高は18ｃｍを基本とした。

なお各階段の踏面の表面仕上げはクレイ舗装とした。

② 路面工　（入口広場工事　平成２年度施工、第15図，第17図）

入口広場は、東南の駐車場に隣接している文字どおり当古墳の入口と言える場所であり、ガイダンスと休養の場でもある。地先境界ブロックによる15m×10mの範囲に説明板・史跡名称碑・ベンチ等を配した。路面の内、張り石には南陽市釜渡戸産の花崗閃緑岩切石（南陽石）を用い、その他の所は敷き砂利とした。

(５)修景工事

①　張芝工　（平成２年度～４年度施工　第７図）

墳丘周辺平地部には、盛土面の維持と見学用として、墳丘の自生植物のイメージに近く当地方の気候に合った野芝4,435m²を張った。

②　高木植栽　（平成３年度～４年度施工　第７図，第18図）

墳丘周辺に緑陰として高木の植栽を行った。樹種は、景観上効果的であって耐寒性のあるケヤキを入口広場南に植えた他は、「南陽市の木」であるサクラ系とし、ヤマザクラ６本及びエドヒガンザクラ２本を植えた。

③　低木植栽　（平成３年度～４年度施工　第７図，第18図）

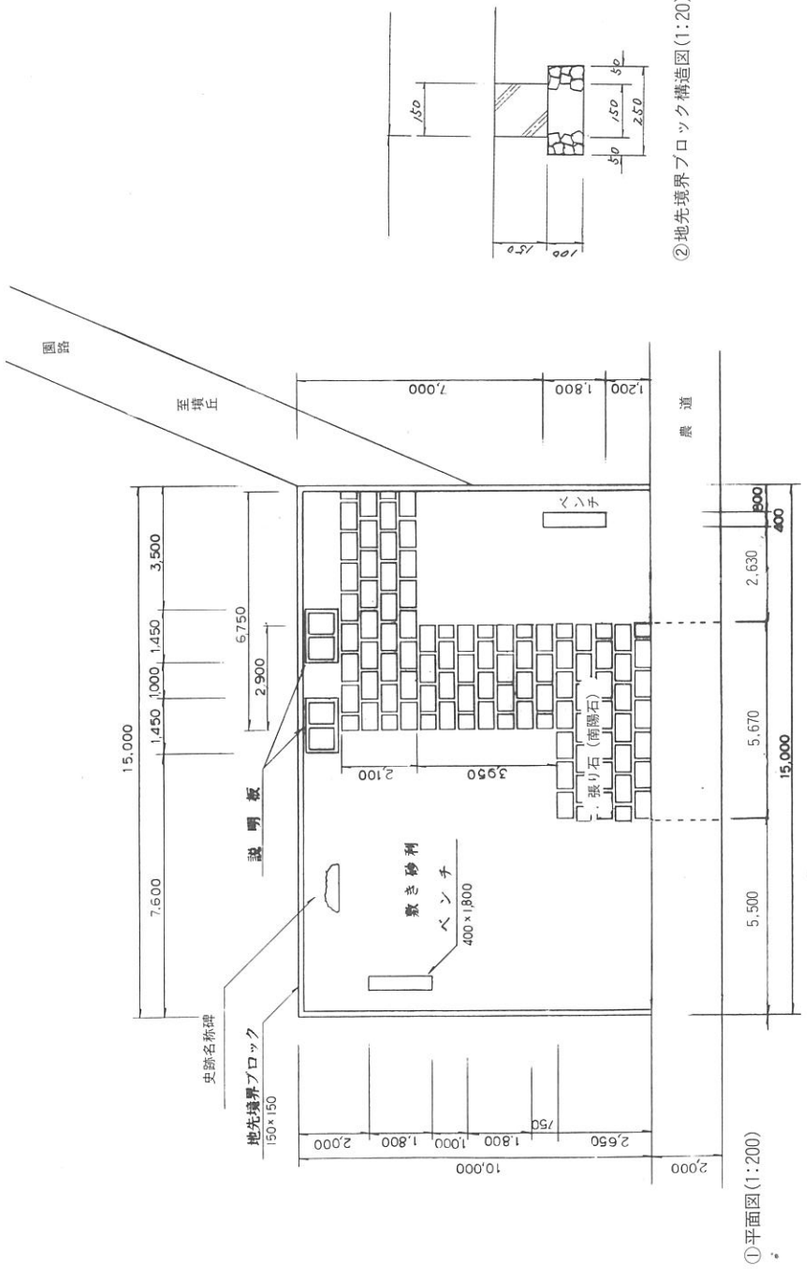
ア　ドウダンツツジ

墳丘面及び自生植物の保護を目的として墳丘斜面への立入りを規制するため、墳麓と両墳頂盛土肩部に低木を巡らせることとした。樹種は当地方の寒さにも耐えられるドウダンツツジとし、景観上の配慮から高さが概ね60ｃｍにそろうようにした。植付は１ｍ幅内に２列とし、間隔は１ｍ当り３本と設定のうえ生垣支柱を設けた。植付の位置については、墳麓では推定墳麓線の外０.５～１.５ｍの範囲とし、墳頂では盛土肩部端部から内側１ｍの範囲とした。ドウダンツツジは計2,228本使用した。

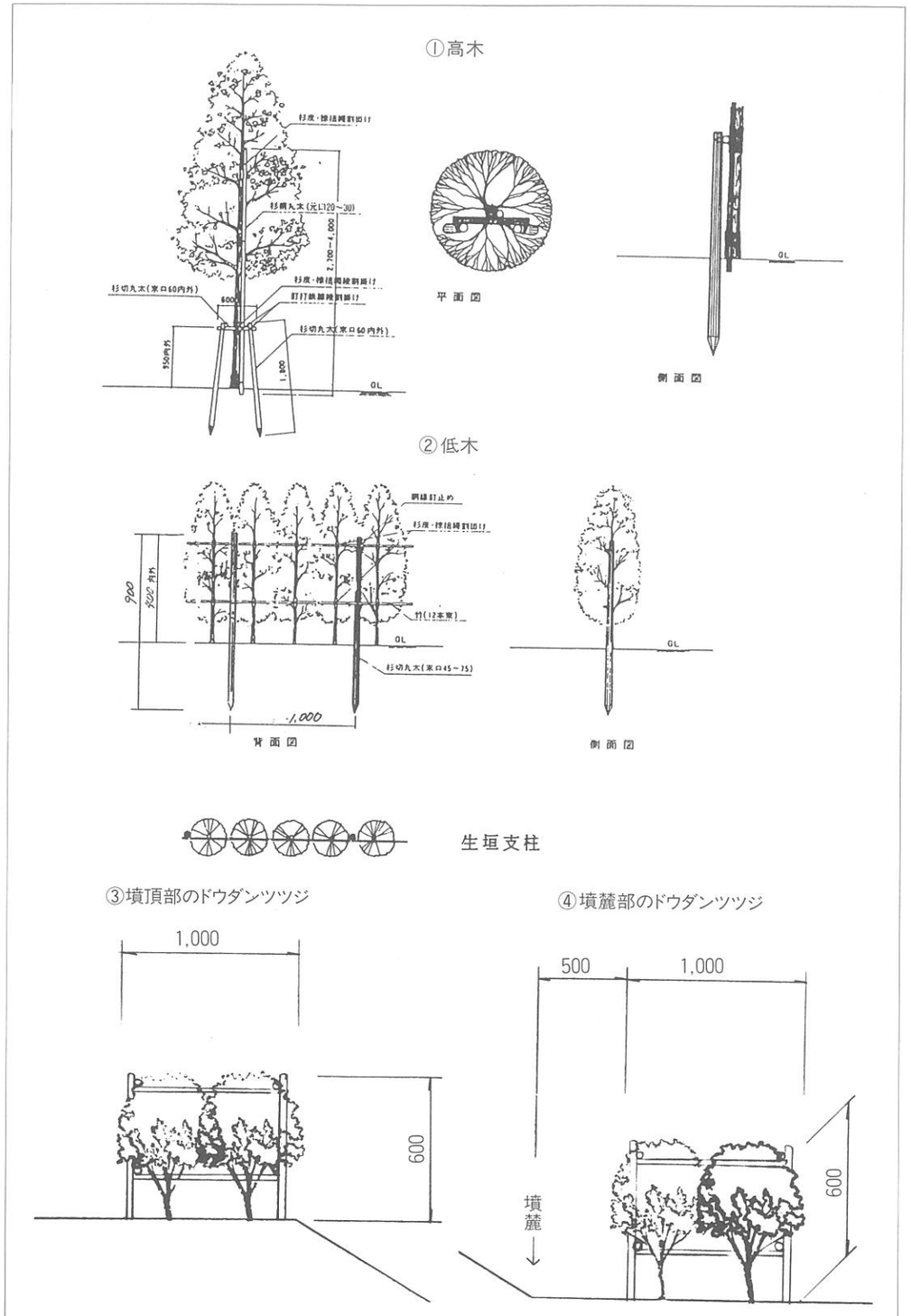
イ　ベニカナメ

指定地南端は市道に接していることから、車両侵入対策用と目隠を兼ねて耐寒性のあるベニカナメ（セイヨウベニカナメ）を植えた。１ｍ当り３本の１列植えで、計303本とし高さを概ね80ｃｍに設定し、あわせて生垣も設けた。

(６)教養施設工事



第17図　入口広場工詳細図



第18図　高木・低木植栽構造図

①　説明板　（平成４年度施工　第19図）

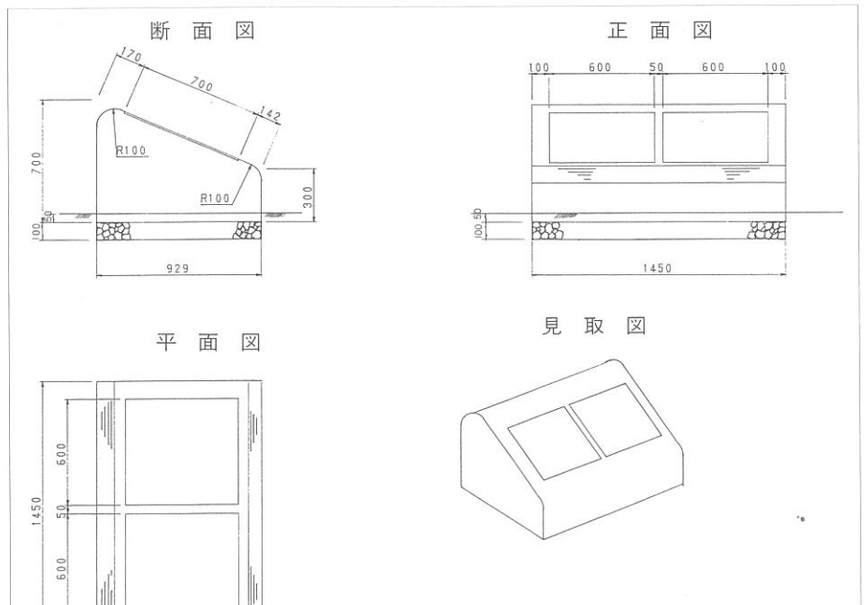
説明板は、駐車場からの見学客が最初に訪れる「入口広場」の西端に設けた。架台は、古墳の眺望と景観への調和を考えて、高さを70ｃｍと低くし、板面を20°強に傾斜させた。基礎は人力床掘のうえ砕石敷とした。説明板は架台１基に２枚ずつ計４枚とし、案内板的内容も含め、とくに当古墳には付属のガイダンス施設等がないことから周辺遺跡の状況や古墳と古墳文化の概説も載せた。材質はステンレス板（３ｍ／ｍ厚さ）で、表面は塩化ビニールシートにシルク印刷したものを張りクリアーシートでコーティングを行った。１枚の寸法はたて70ｃｍよこ60ｃｍである。なお、説明板の原案について、南陽市文化財保護審議委員の佐藤鎮雄先生（市立漆山中学校教員、日本考古学協会々員）の助言をいただいた。

②　史跡名称碑　（平成４年度施工　第20図）

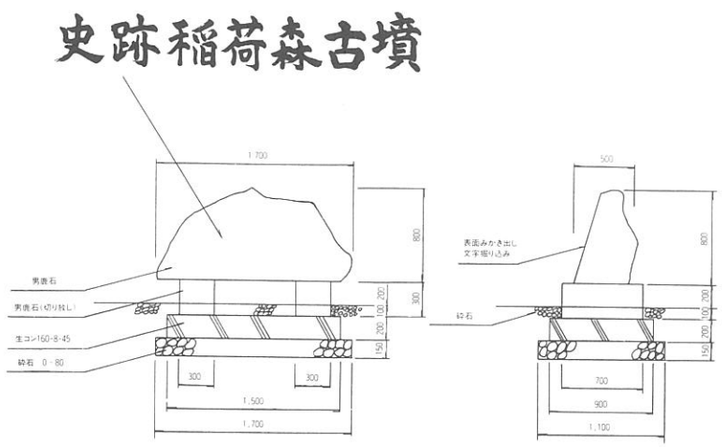
説明板の南隣に、自然石（男鹿石　約1,700×500×800ｍ／ｍ）を片面割のうえ、本研磨した史跡名称碑を設けた。基礎はコンクリート打とした。碑面には、大竹俊博南陽市長の筆により「史跡稲荷森古墳」と刻した。

③　方位盤　（平成４年度施工　第21図）

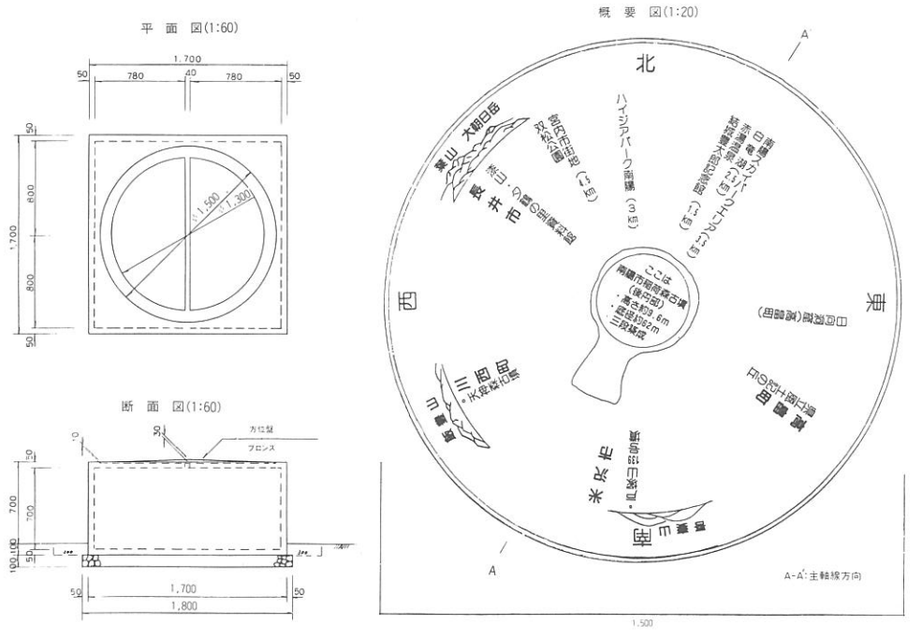
稲荷森古墳墳頂からは、長岡山丘陵のある北東方向を除きほとんど視界を遮るものがなく眺望が良好であることから、当地方の理解を深めるため、後円部中央に方位盤を設けた。置賜盆地をとり囲む高山や近隣の古墳及び市内の名勝や関係施設等と共に、本古墳の概要図も配した。盤はブロンズ製で直径１.５ｍ、台座は擬石調コンクリート製である。



第19図　説明板構造図



第20図　史跡名称碑構造図



第21図 方位盤構造図

④　古墳広場　（平成３年度施工　第22～24図）

山形県の地理的、歴史的概要及び大型古墳等を、見て触れて楽しく学習できる場として、指定地北西部に古墳広場を設けた。

グラニット製御影石調カラータイル（９×９×２ｃｍ）を使用し、南北13ｍ東西10ｍの範囲に県境・山形県域（Ｓ＝１／12,500）・最上川・平野部（盆地部）・山岳部・南陽市域・隣県・海域等と大きく色わけをした地図を設けた。この内に、県内の大型古墳として本古墳の他、川西町の天神森古墳（註16）、山形市の菅沢２号墳（註17）、米沢市の戸塚山139号墳（註18）について、１／100のミニチュア（特殊セメント製）を各実測図に基づき作製して配した。これらの地名や説明文及び県内主要都市名並びに主要国指定史跡（酒田市城輪柵跡等）については29ｃｍ角の陶磁板により標示し、また、盆地名等は29×10ｃｍの陶磁板で示した。蔵王連峰等主要な山岳については、29ｃｍ角の絵陶磁板により表現した。これは山岳に詳しい渡部幸夫氏（南陽市商工観光課職員）の作品を原画とした。

なお、この広場の基礎は、クラッシャーラン路盤（厚10ｃｍ）にコンクリート打のうえ下地モルタル塗りを加えたものである。

（７）　休養施設工事　（平成３年度～４年度施工）

①　四阿　（第25図）

本古墳の西半を見渡すことができる指定地北西角に、四阿１棟を設置した。柱間３ｍ四方の方形造とし、四阿内ベンチは眺望上北と西に設けた。基礎は鉄筋コンクリート打である。柱や梁・タルキは、鉄骨にモルタル下塗りした上に樹皮仕上げを現地で施した擬木を用いた。屋根は、わら調モルタル葺とし、屋根裏地はリシン仕上げとした。床は周辺より約５ｃｍ高くし、レンガ舗装とした。なお、四阿全体の色調は、景観に合う仕上げにした。

②　ベンチ　（第26図）

入口広場内及びくびれ部西側並びに指定地北東角に２基ずつベンチを設けた。材質は、タマミカゲ調擬石とヒノキ材である。

（８）　管理施設工事　（平成４年度施工）

①　水飲み　（第27図）

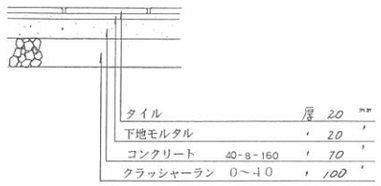
手洗いに隣接し、立形水栓・胴長横水栓各１を有する水飲み１基を設けた。

②　防護柵　（第15図、第28図）

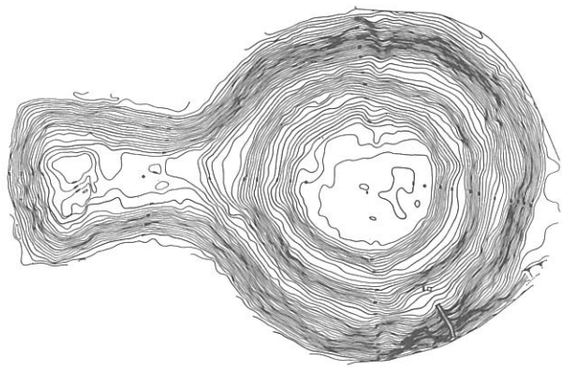
指定地東側に長岡堰があることから、転落防止のため防護柵を設けた。景観上高さを80ｃｍにおさえた。

③　史跡境界杭　（第29図）

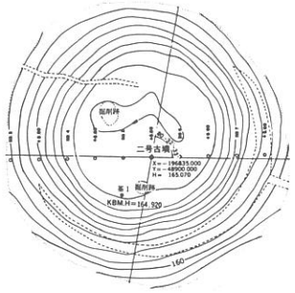
史跡名勝天然記念物標識等設置基準規則第４条に基づき、10基を設置した。



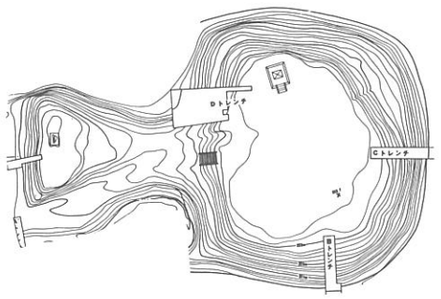
第22図　古墳広場タイル工断面図(1:25)



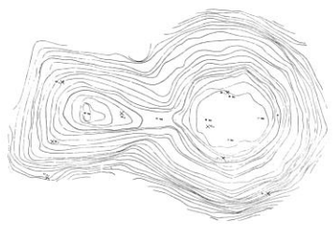
国指定
稲荷森古墳(南陽市)
(全長約96ｍ、前方後円墳)



県指定
菅沢2号墳(山形市)
(直径約56ｍ、円墳)



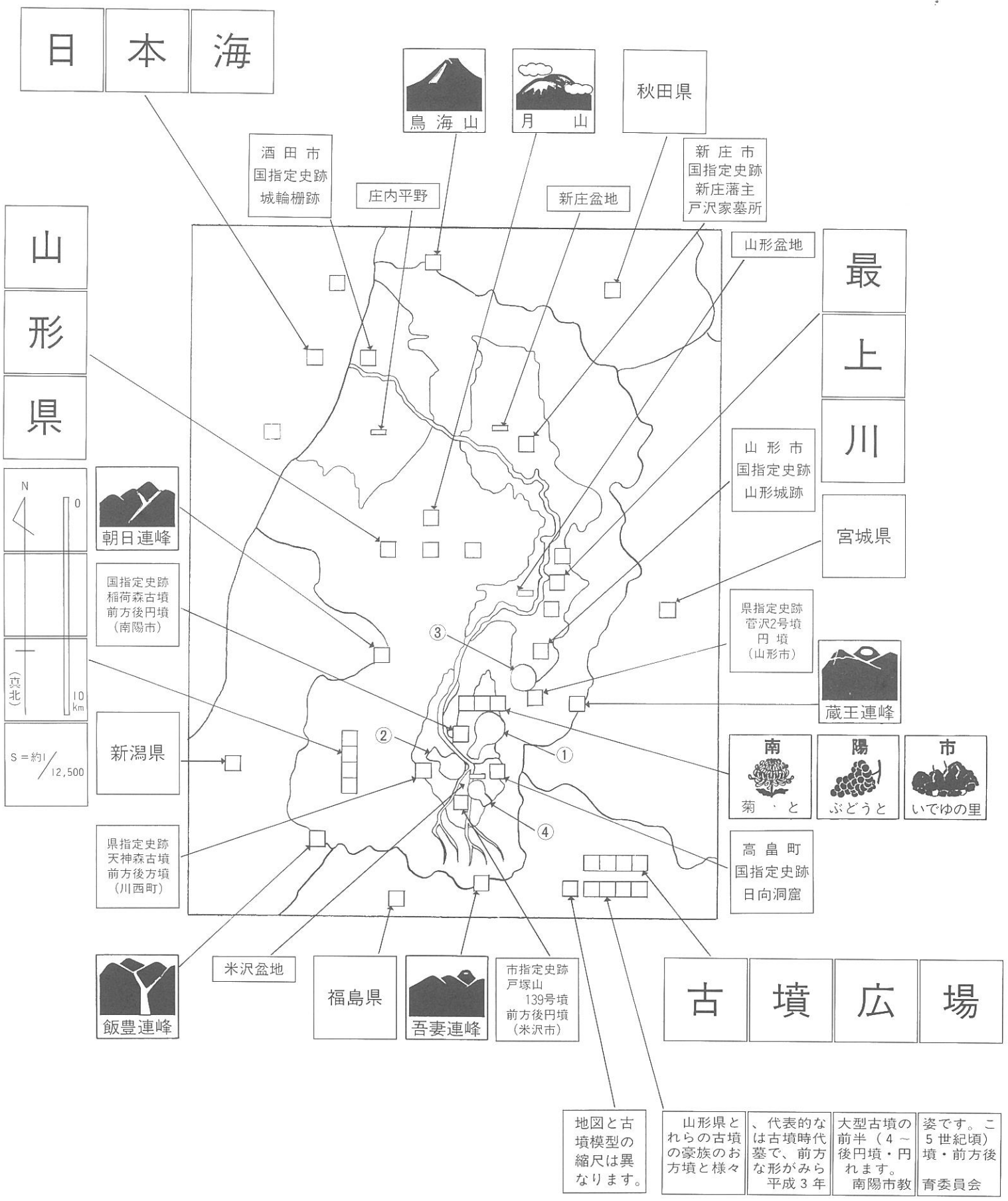
県指定
天神森古墳(川西町)
(全長約75ｍ、前方後方墳)



米沢市指定
戸塚山139号墳(米沢市)
(全長約54ｍ、前方後円墳)

0　25ｍ

第23図　古墳広場内古墳模型原図



地図と古墳模型の縮尺は異なります。

山形県と、代表的な
れらの古墳は古墳時代
の豪族のお墓で、前方
方墳と様々な形がみら
平成３年

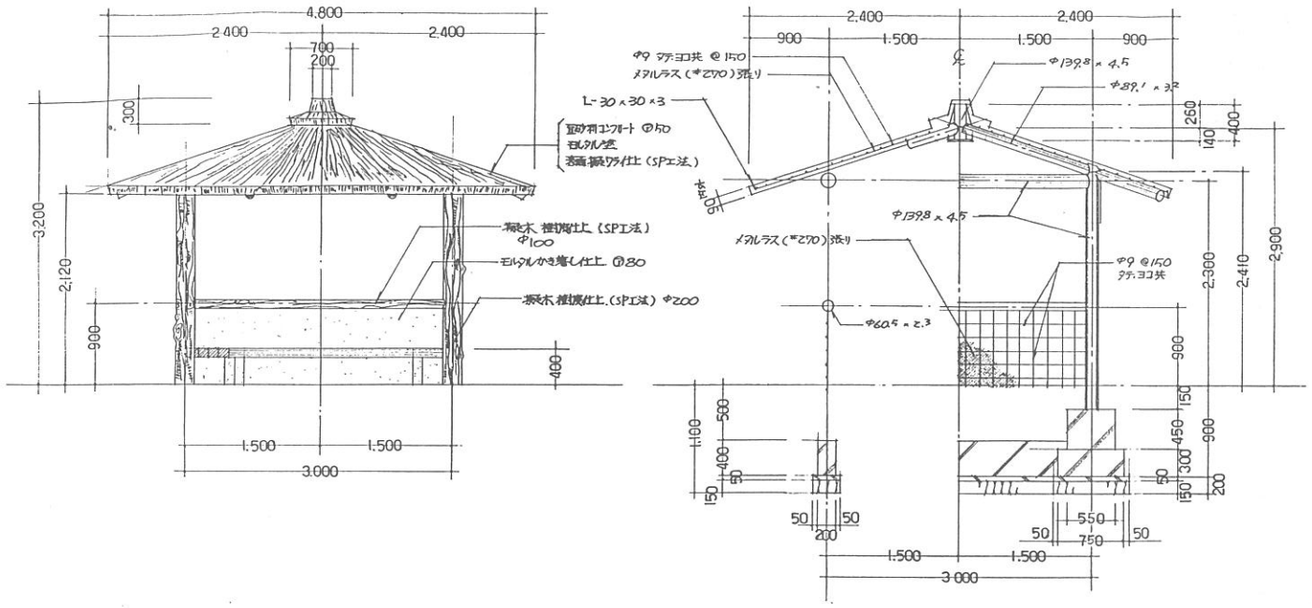
大型古墳の
前半（４～
後円墳・円
れます。
南陽市教

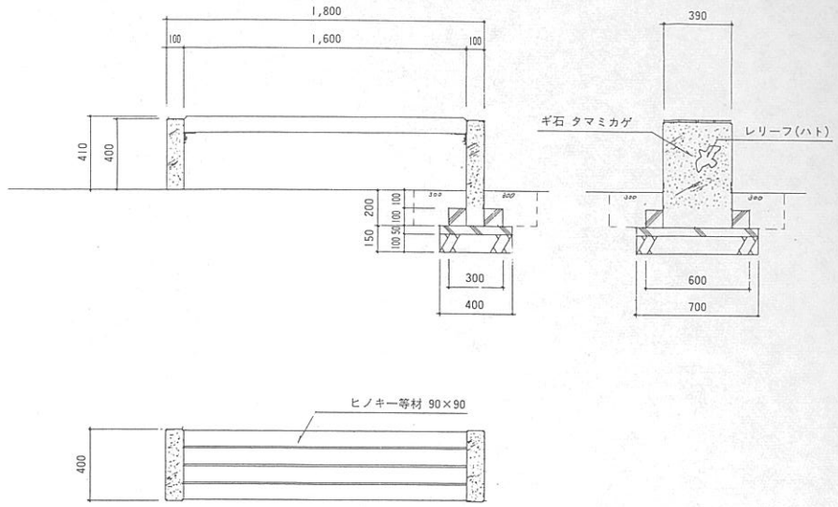
姿です。こ
５世紀頃）
墳・前方後
育委員会

古墳ミニチュア
①稲荷森古墳　②天神森古墳　③菅沢２号墳　④戸塚山139号墳

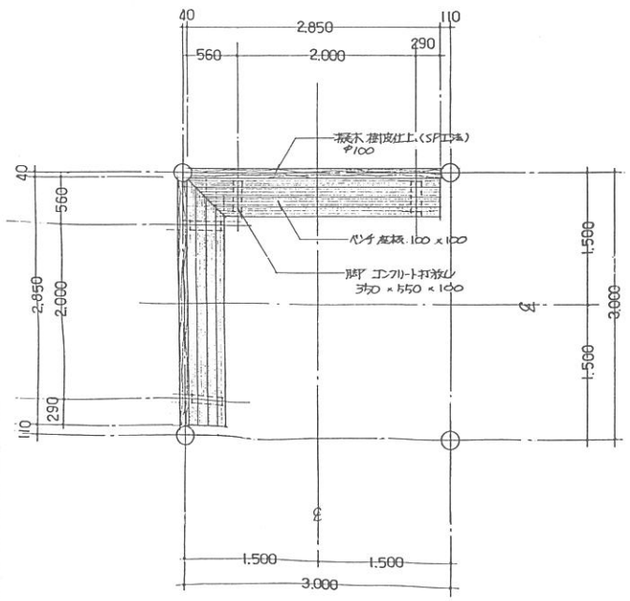
（古墳広場は縦13ｍ×横10ｍ
絵陶磁板は縦29cm×横29cm）

第24図　古墳広場平面図

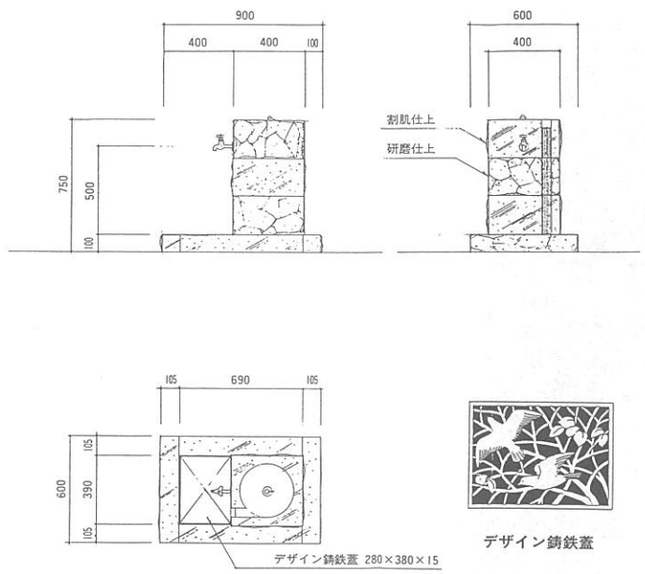




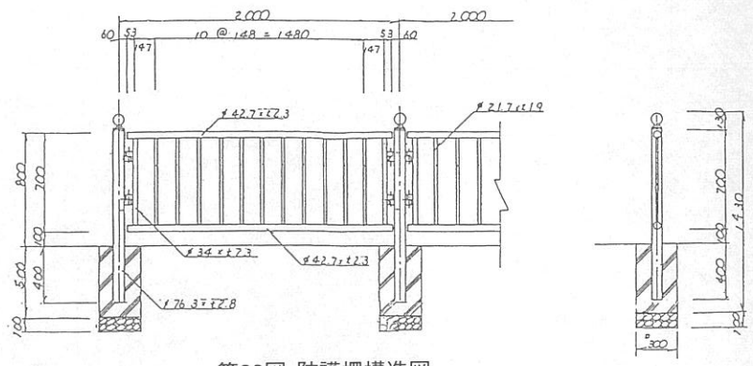
第26図 ベンチ構造図



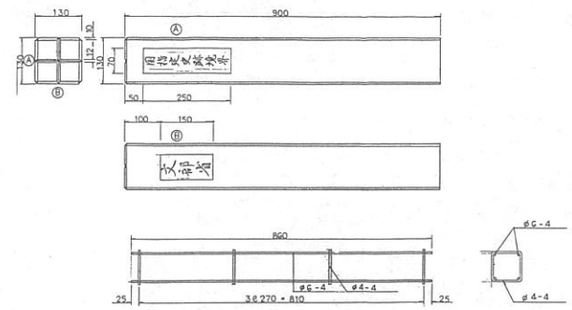
第25図　四阿構造図



第27図 水飲み構造図



第28図 防護柵構造図



第29図 史跡境界杭構造図

④　便所　（第30～31図）

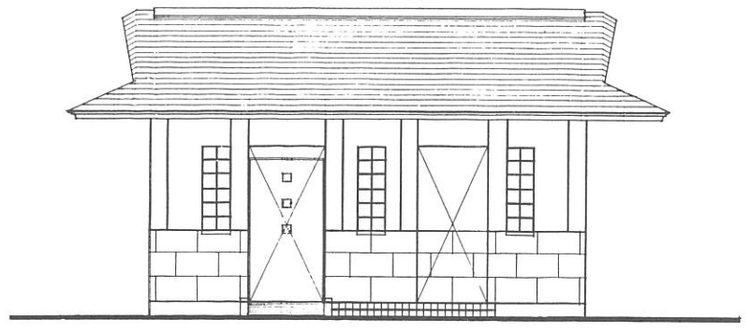
古墳の景観を妨げず、また、駐車場に近いうえ堰に接することなどから、指定地東端に便所を設けた。このため、古墳景観に合う佇まいになるよう設計上配慮した。

鉄筋コンクリート（一部木造）入母屋造で規模は６×3.8m、出入口は駐車場のある南面に設けた。壁外面は上半が吹付タイル仕上げ、下半が石目調（目地入）吹付タイル仕上げとし、採光としてガラスブロックによる格子風の窓を設けた。屋根はアスファルト下地に長尺カラー（黒色）鉄板葺とした。また壁内面は吹付タイル仕上げ、天井はアクリルリシン吹付仕上げにした。床は100角磁器質タイル貼りとし、清掃用にステンレスグレーチングを配した。ポーチには段差を付けず、車椅子が通れるようにした。外溝は建物周りに砂利敷込のうえU字溝を配した。

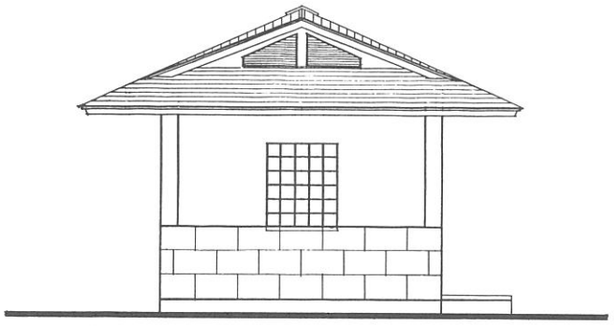
男子便所は和風大小兼用便器と小便器及び洗面器各１基、身障者用便所は身障者用洋風便器と洗面器各１基、女子便所は和風大便器と洗面器各１基を配した。なお、身障者用便所は普段は女子用として利用できる間取りとした。

浄化槽は分離接触ばっ気方式15人槽で、便所の北に設け、排水は、南陽市長岡堰水利組合の許可を得て、隣接の長岡堰へ導くものとした。

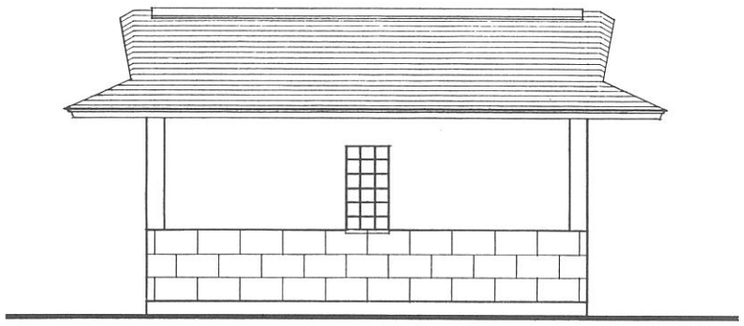
なお、照明装置はタイマー制御による自動点滅とし、また、冬期間は閉鎖とするためシャッター付出入口とした。



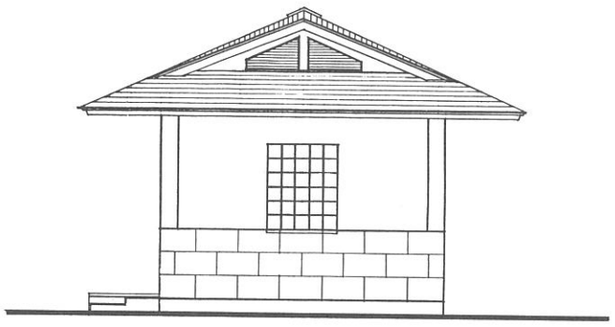
①南立面図



③西立面図



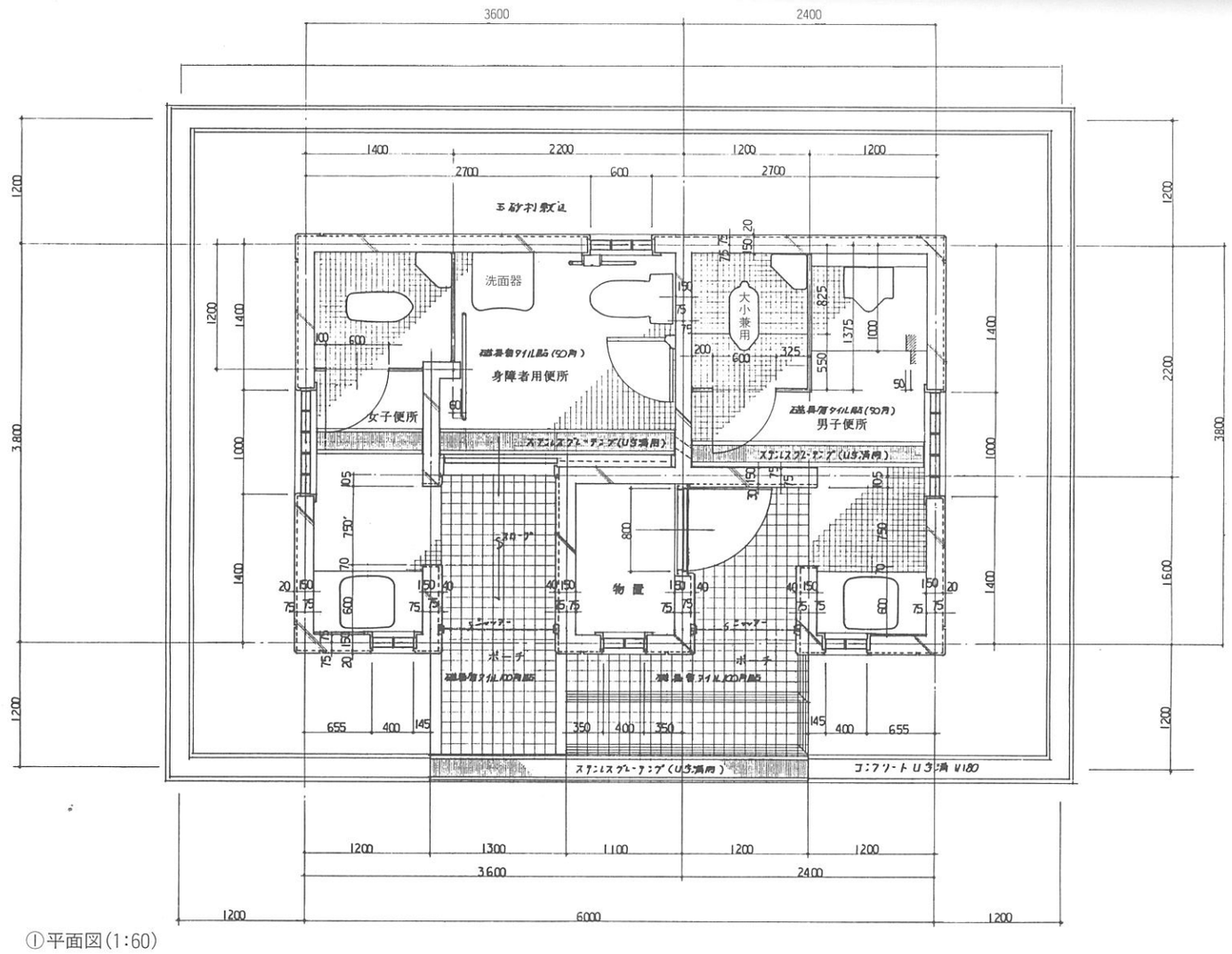
②北立面図



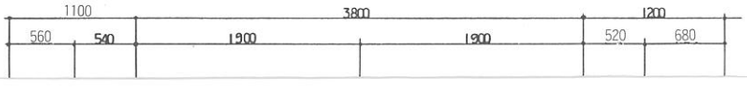
④東立面図

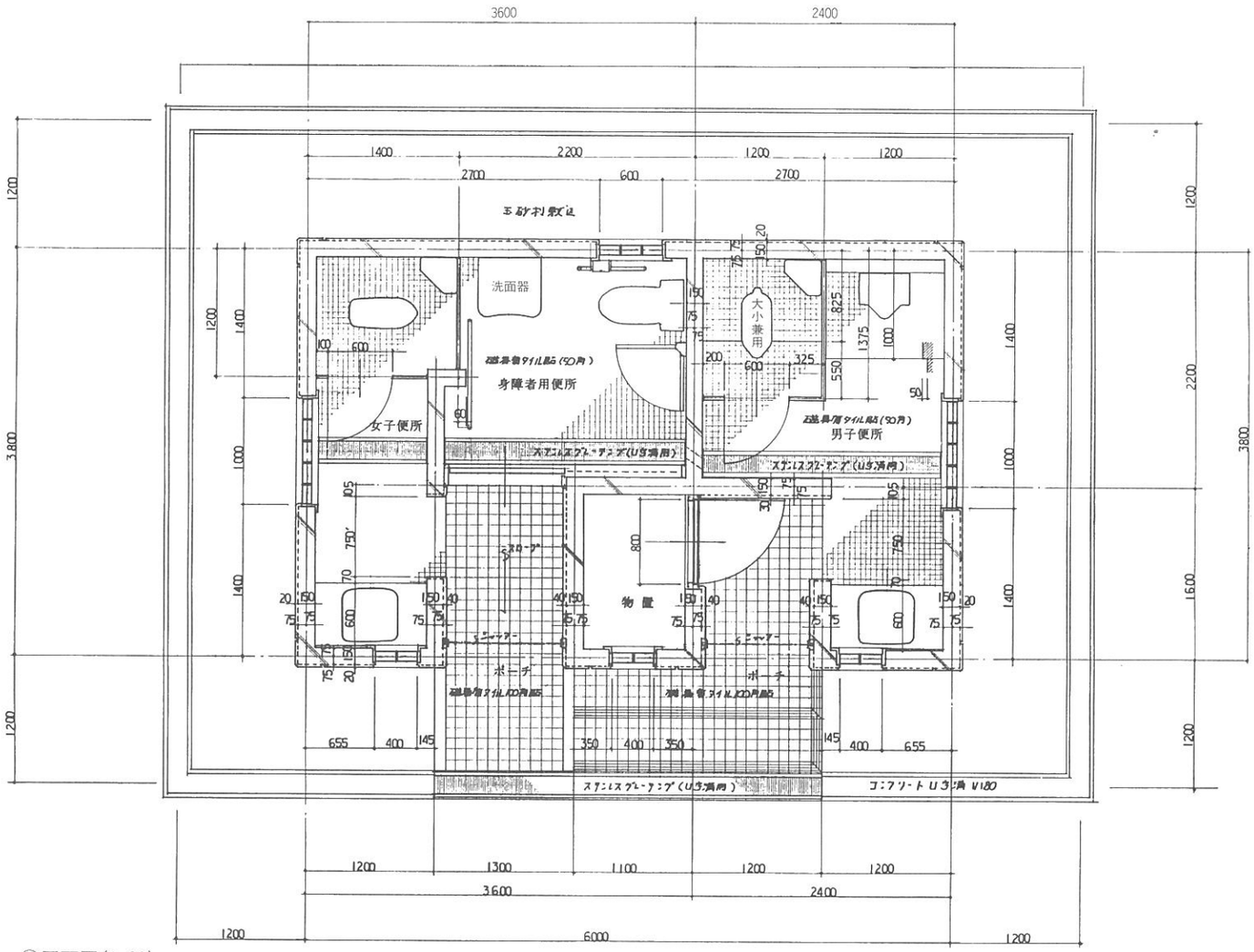
0　3m

第30図　手洗い立面図

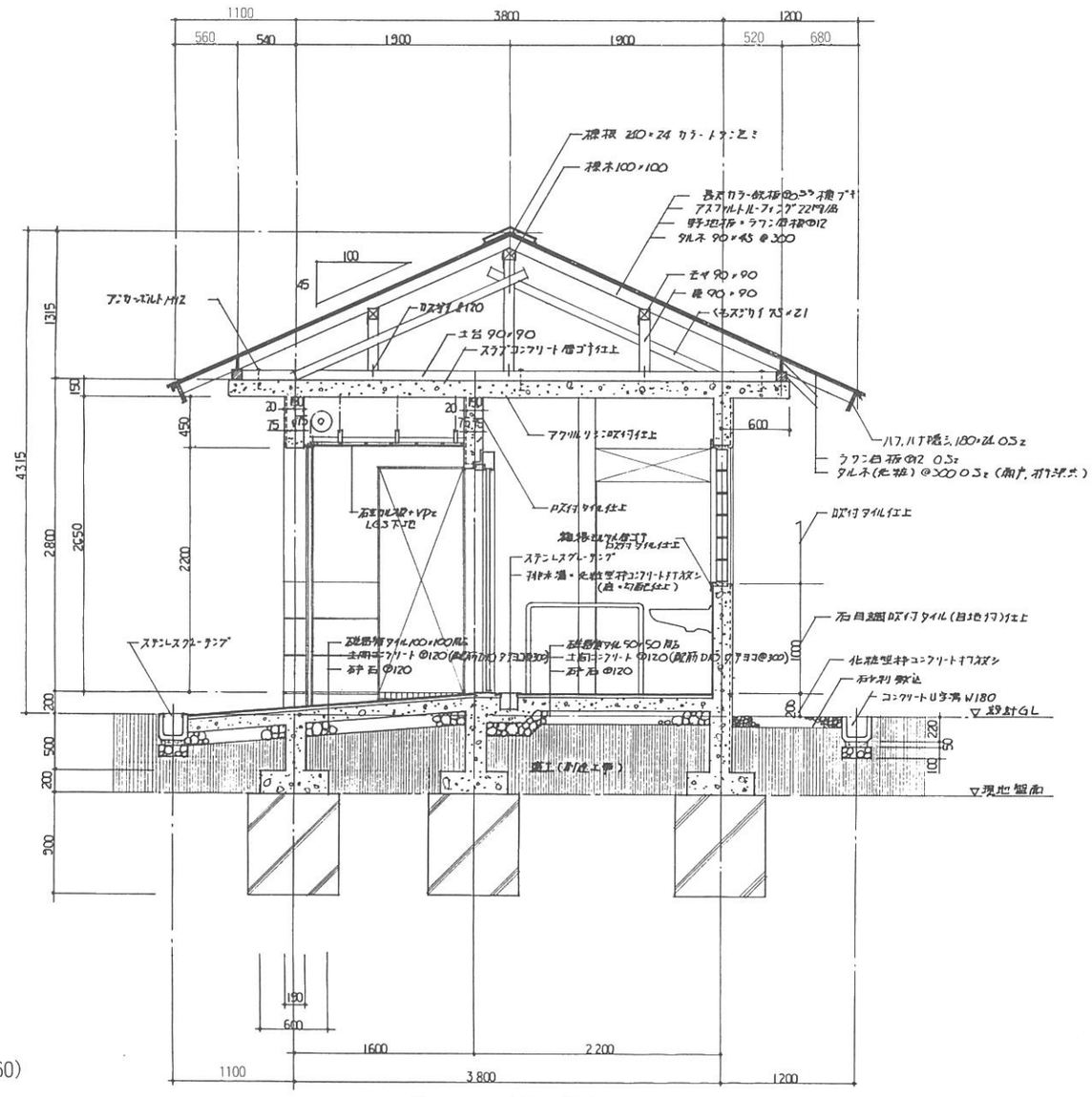


①平面図(1:60)





①平面図(1:60)



②矩形図(1:60)

第31図　手洗い構造図

第５章　整備のまとめ

1　整備と今後の管理

東北地方における大型古墳の整備例はまだ数は多くはなく、とくに宮城県名取市雷神山古墳が著名であるが、当古墳はこれに続く例であり、山形県内でも大型古墳の整備としては初めてのものであった。先述のとおり本整備は、関係機関及び各位の助言と協力・指導により完了したものであるが、今後はいかに保存、管理しどのように活用して行くかが大切な課題であると言える。 特にものの豊かさから心の豊かさへ、もしくは観光における歴史や文化への志向が強まる傾向性、または生涯学習推進等の観点から本古墳の果すべき役割は更に増加するものと考えられる。

具体的には植栽及び施設の維持管理につとめることが当面の課題であるが、合せて市内及び周辺の古墳文化の調査研究によって本古墳との係わりをより明らかにしていく努力も必要である。

今後は広く活用を図ると共に、地域のシンボルの一つとして大切に取扱っていくべきものであると言える。

2　英文要旨

SUMMARY

INARIMORI ANCIENT BURIAL MOUND

(INARIMORI KOFUN)

Inarimori Ancient Burial Mound is located in a place 270 km north of Tokyo at an altitude of 216 m Nagaoka, in Nanyo City, Yamagata Pref.. It is some 3 km northeast of the Mogami River, and 1 km south of Akayu Spa. It is a burial mound with a square front and a circular main (back) section. The front section faces south.

Total length	9 6m
Diameter of the circular section	6 2m
Length of the square section	3 4m
Width of the ends of the square section	3 0m
Height of the circular section	9.6m
Hight of the square section	4m

This burial mound, characteristically without a moat, has three terraces in the circular section and two partial ones at the square end.

It is also characterized by the absence of such furnishings as terracotta HANIWA and roofing stones FUKIISHI.

Inarimori tumulus was discovered in 1933. After that, archaeological excavations were held in 1978,1979,1987,1988. However the burial chamber has not yet been found, in the interests of preserving the mound.

This burial mound is the tomb of a chief in ancient Okitama Province. In all likelihood, it was constructed in the latter part of the fourth century.

Inarimori Kofun, the biggest found in Yamagata Pref., belongs to the largest group in Tohoku District. This is the farthest north, along the coast of the Sea of Japan, that such a large scale burial mound of this design has been found.

For these reasons, Inarimori Ancient Burial Mound was designated a National Historic Site in 1980.

In the hope of preservation and making best use of this site, the construction of a historical park is due to be completed in 1993.

Basic plans for preservation works and construction are as follows.

1. This burial mound will be preserved in an existing state as far as possible. Therefore, only the landslide area will be repaired with banking and sodding. Small stone shrines and stone steps at the mound will be removed. To prevent the surface of the slope from landslide, native wild plants will be carefully grown.

   For the purpose of preventing entry on to the slope, shrubs will be planted in two columns at the foot of the slope and at the edge of the top of the mound.

2. To preserve the mound, the construction work of the level ground will be done away from the slope′s foot line, which was determined through the excavation.

3. Observatory spaces will be created at the top of the mound. On top of the circular section, a large disk explaining direction and view will be set up. In order to prevent further break up of the mound, specially designed steps will be laid.

4. The entrance square will be created to the south east of this site. Within this square, one stone monument, two explanation signboards and two benches will be set up.

5. Arround the mound, the level ground will be stabilized with sand. Sodding and some facilities in keeping with the atmosphere will be created.

   - a lavatory
   - a drinking fountain
   - some trees
   - an arbor
   - some benches
   - protective fences
   - some water sprinklers
   - shrub hedge

6. The service water pipes and drains will be laid under the level ground.

7. Owing to the archaeological features around the mound, stabilizing and digging will take place as carefully as possible.

8. To the north west of the this site, a large model map including some model large mounded tombs will be positioned with information about the Large Kofun of Yamagata Pref..

9. Some useful data gleaned from the excavations will be put to practical use.

註

註１	５万分の１地形分類図「赤湯・上山」同説明書	昭和58年(1983)	山形県
註２	『諏訪前遺跡発掘調査報告書』	昭和61年(1986)	山形県教育委員会
註３	『南陽市史考古資料編』	昭和62年(1987)	南陽市史編纂委員会
註４	平成４年度長岡山遺跡分布調査		南陽市教育委員会
註５	『沢田遺跡発掘調査報告書』	昭和60年(1985)	山形県教育委員会
註６	『赤湯町史』	昭和43年(1968)	赤湯町史編纂委員会
註７	「置賜盆地の古代文化－特に赤湯古墳群に就いて－」	昭和13年(1938)	東置賜郡教育会
	『東置賜郡史』上巻		
註８	「赤湯町大字長岡狐山遺跡調査小報」『歴研月報』特集号３	昭和37年(1962)	山形大学教育学部歴史学研究会
	および註６に同じ		
註９	「南陽市稲荷森古墳の測量調査」	昭和52年(1977)	山形考古学会（佐藤鎮雄）
	山形考古学会第10回研究会発表要旨		
註10	『稲荷森古墳昭和53年度調査概報』	昭和54年(1979)	山形県立博物館
	『稲荷森古墳昭和54年度調査概報』	昭和55年(1980)	山形県立博物館
註11	『稲荷森古墳-史跡整備に係る昭和62年度発掘調査概報-』	昭和63年(1988)	南陽市教育委員会
註12	『稲荷森古墳-史跡整備に係る昭和63年度発掘調査報告書-』	平成元年(1989)	南陽市教育委員会
註13	註４に同じ		
註14	註12に同じ		
註15	註12に同じ		
註16	『天神森古墳発掘調査報告書』	昭和59年(1984)	川西町教育委員会
註17	『菅沢２号墳発掘調査報告書』	昭和62年(1987)	山形県教育委員会
註18	『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』	昭和58年(1983)	米沢市教育委員会

参　考　文　献

『史跡観音山古墳－保存修理事業報告書』	昭和56年(1981)	群馬県教育委員会
『史跡五色塚古墳 復原整備事業概要』	昭和57年(1982)	神戸市教育委員会
「遺跡整備資料Ⅱ」『古墳・墳墓』	昭和58年(1983)	奈良国立文化財研究所
『史跡虎塚古墳 保存整備報告書』	昭和60年(1985)	勝田市教育委員会
『稲荷山古墳 史跡埼玉古墳群保存修理事業報告書』	昭和60年(1985)	埼玉県教育委員会
「東日本における古墳文化の成立と展開-とくに福島･宮城･山形を中心として」『駿台史学』67	昭和61年(1986)	明治大学（大塚初重）
『史跡遠見塚古墳保存修理事業報告書』	昭和61年(1987)	仙台市教育委員会
『史跡雷神山古墳保存修理整備報告書』	昭和62年(1988)	名取市教育委員会
『Japanese-English Dictionary of Japanese Archaeology』	昭和63年(1988)	奈良国立文化財研究所
『図設　日本の史跡、第２巻　原始２』	平成３年(1991)	同朋社出版
『史跡綾羅木郷遺跡保存修理事業報告書』	平成４年(1992)	下関市教育委員会
『史跡蛭子山・作山古墳整備事業報告書』	平成４年(1992)	加悦町教育委員会
『史跡根古谷台遺跡保存整備事業報告書』	平成４年(1992)	宇都宮市教育委員会
『朝田墳墓群保存修理事業報告書』	平成４年(1992)	山口市教育委員会

写真図版

1　着工時全景（平成元年度、東南から）

2　前方部南側（平成元年度）

図版１　整備開始時状況（１）

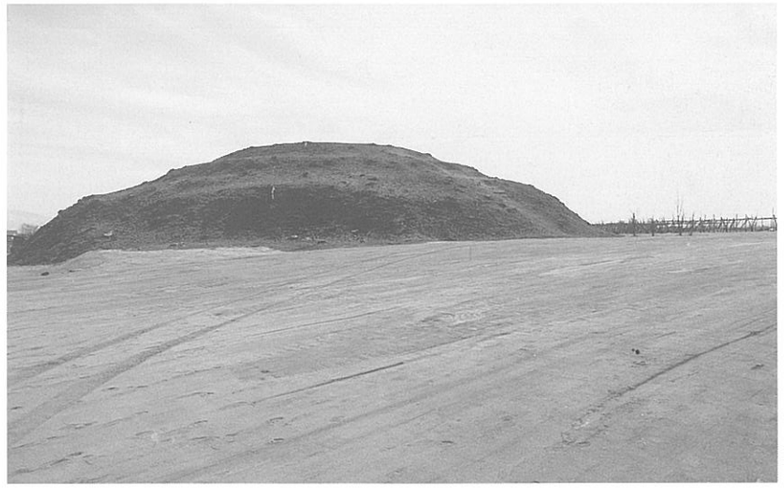
1　後円部北側（平成元年度）

2　後円部北東側（平成元年度）

図版２　整備開始時状況（２）

1　前方部南側
（平成２年度）

2　後円部北側
（平成２年度）

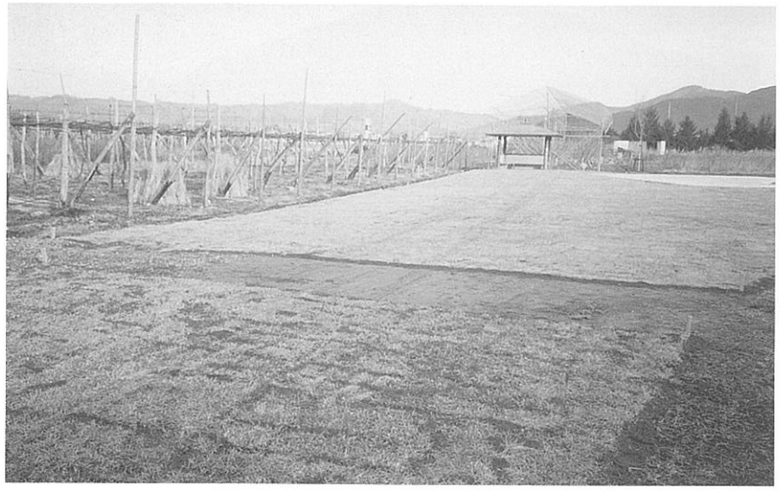


3　後円部北東側
（平成２年度）

図版３　平地部盛土工事

1　張芝工事作業状況
（平成２年度）

2　張芝工事完了状況①
（平成２年度）



3　張芝工事完了状況②
（平成３年度、後円部西側）

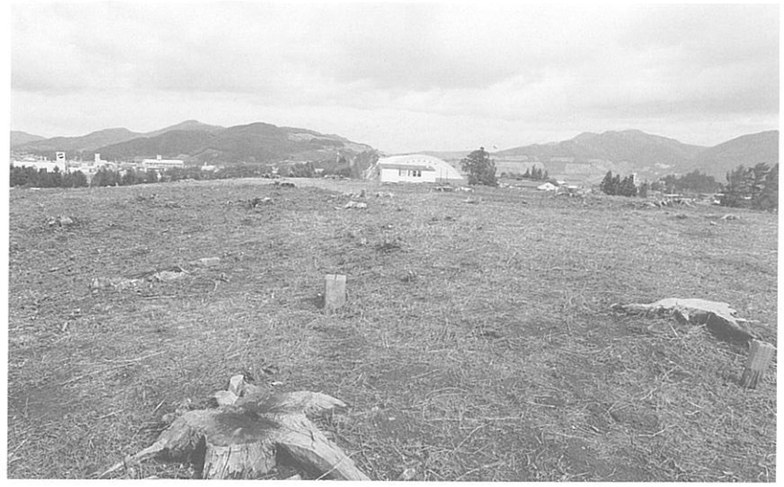
図版４　平地部盛土・張芝工事

1　工事前状況
（前方部から後円部を望む）

2　前方部頂盛土てん圧作業

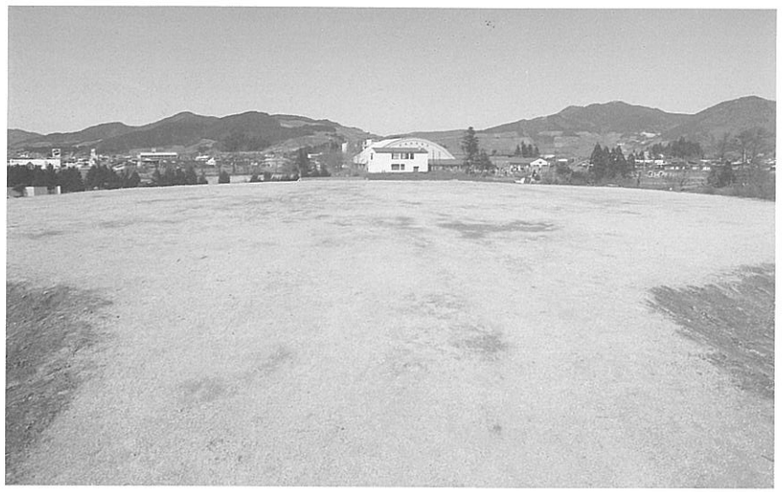
3　盛土・階段工事完了

図版５　墳頂部盛土・階段工事（１）（平成２年度）



1 工事前状況
（南から）

2 盛土・てん圧
作業
（南東から）

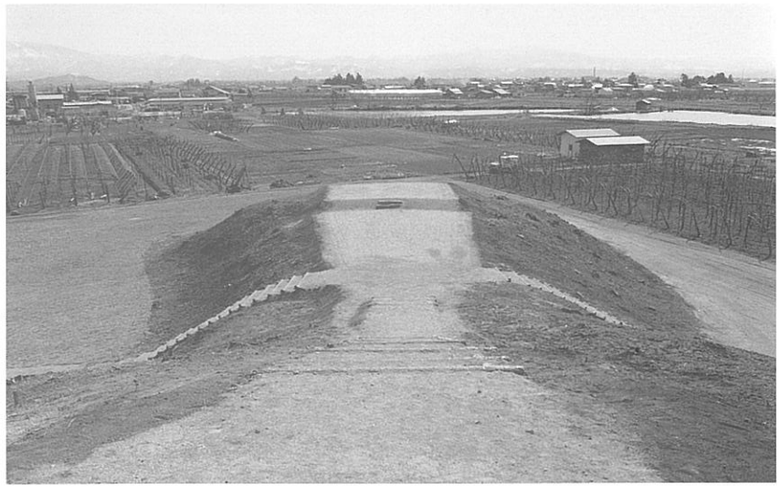


3 盛土工事完了
（南から）

図版６　墳頂部盛土・階段工事（２）（平成２年度）

1 工事前状況
（後円部から前方
部を望む）

2 前方部頂盛土
作業



3 盛土・階段工事
完了

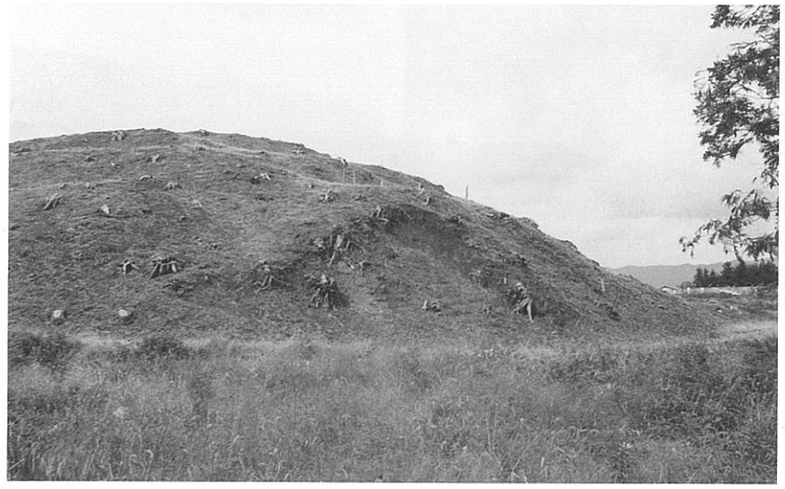
図版７　墳頂部盛土・階段工事（３）（平成２年度）

1　後円部階段工事
作業状況

2　くびれ部東側
階段工事作業
状況

3　くびれ部西側
階段工事完了

図版８　墳丘階段工事（平成２年度）



1　工事前状況

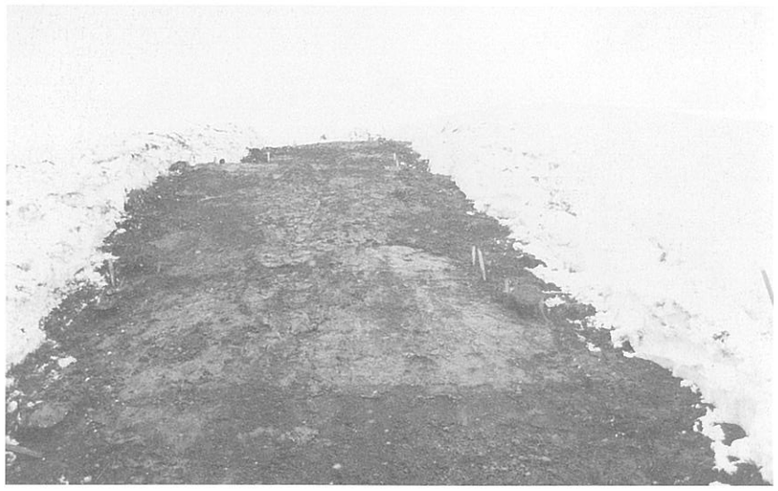
2　盛土・てん圧
作業

3　完了状況

図版９　後円部東側墳丘修復工事（平成２年度）

1　工事前状況

2　盛土・てん圧作業



3　完了状況

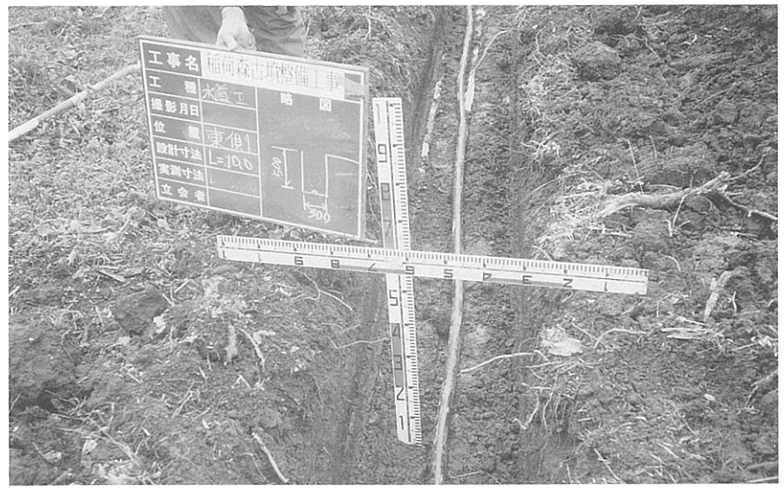
図版10　後円部西側墳丘修復工事（平成２年度）

1　後円部東側
　石段撤去前状況

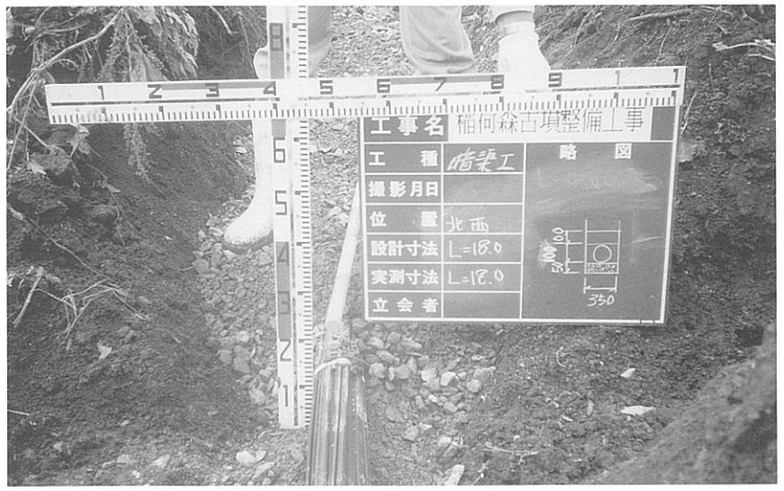
2　後円部東側
　石段撤去後状況

1

2



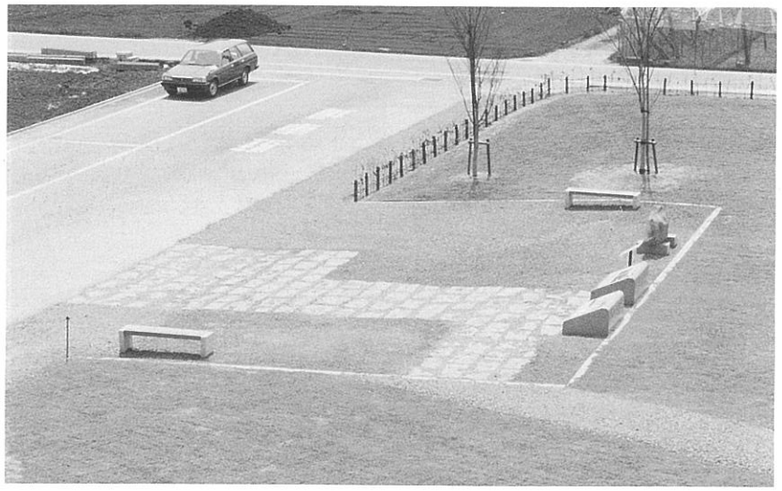
3　給水工事状況



4　排水工事状況

図版11　石段撤去・給排水工事

1 入口広場全景
（東から）



2 入口広場全景
（北から）

3 史跡名称碑
（題字：大竹俊博
南陽市長）

図版12　入口広場工事

1 （高木）ケヤキ

2 （高木）エドヒガンザクラ

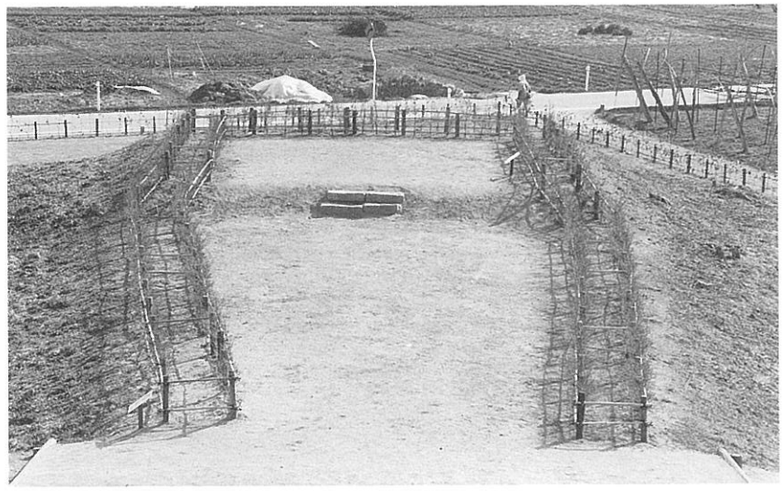
3 （高木）ヤマザクラ

1

2

3

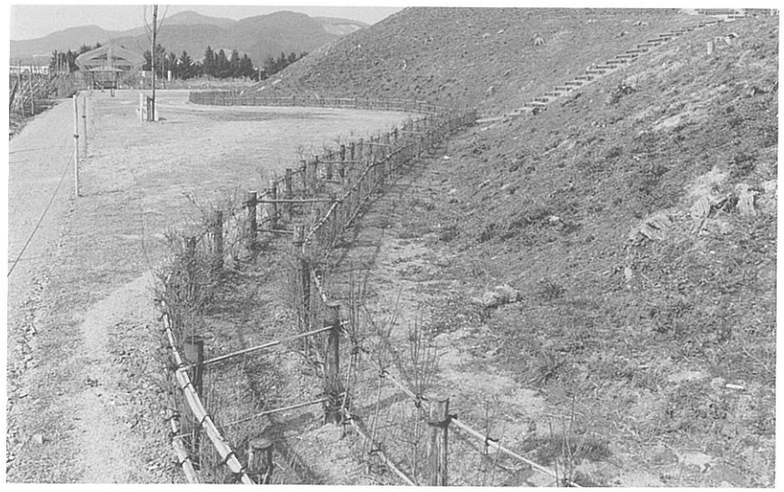
4 後円部墳頂
ドウダンツツジ
植栽



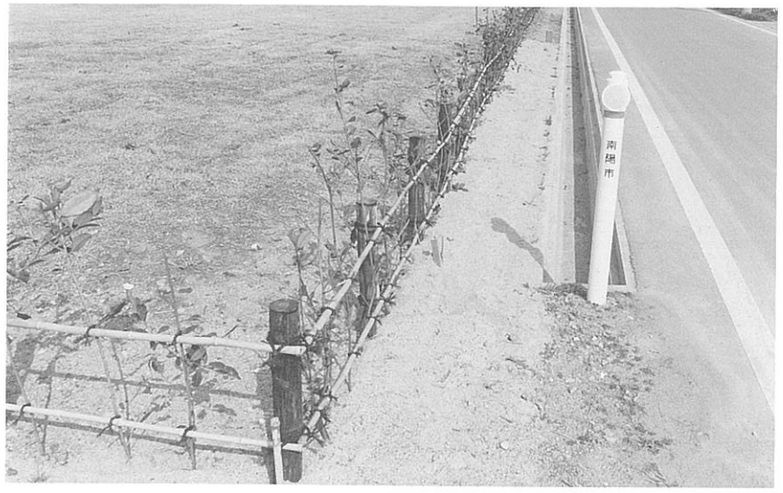
5 前方部墳頂
ドウダンツツジ
植栽

図版13　植栽工事（1）

1　後円部墳麓
　ドウダンツツジ
　植栽

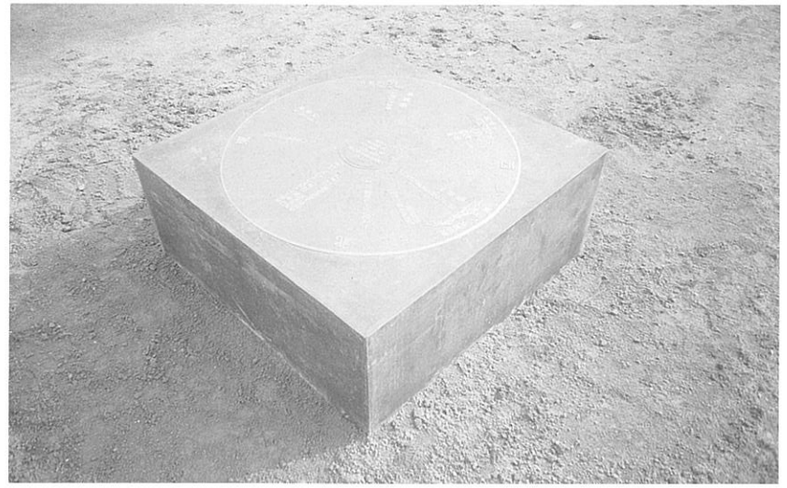


2　前方部墳麓
　ドウダンツツジ
　植栽



3　ベニカナメ植栽

図版14　植栽工事（2）



1　後円部墳頂
　の方位盤

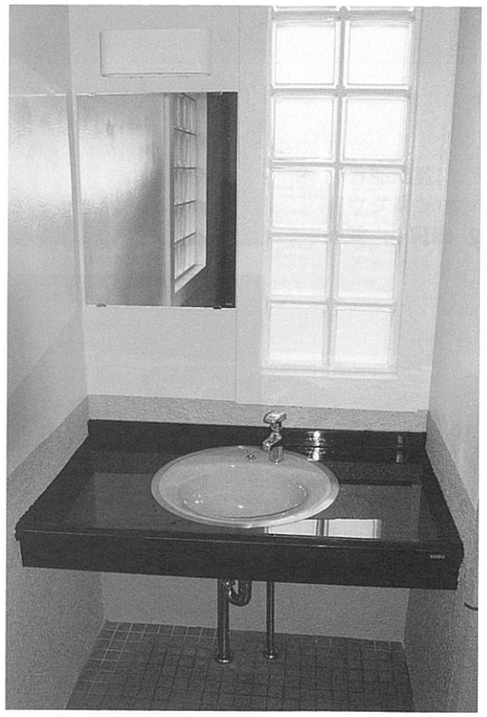
2　四阿

3　ベンチ

図版15　施設工事（1）

1 便所全景（南から）

2 身体障害者用トイレ



3 洗面所

図版16　施設工事（2）

1

2

1 水飲み

2 史跡境界杭

3 防護柵
（転落防止柵）

4 古墳広場内
古墳模型
（稲荷森古墳 S＝1／100）

図版17　施設工事（3）

山形県南陽市
史跡稲荷森古墳
保存修理事業報告書
平成５年３月25日 発行
発　行　南陽市教育委員会
〒999-22　山形県南陽市三間通436-1
TEL 0238 (40) 3211
印　刷　サンワ印刷株式会社
南陽市赤湯　436-22